

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## The Muslim who went to a Muslim Country : The Example of a Chinese Xinjiang Uyghur Living in Istanbul, Turkey

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-05-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊谷, 瑞恵 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00003831">https://doi.org/10.15021/00003831</a>

研究ノート

ムスリムの国へ行ったムスリム  
—トルコ・イスタンブルに住む中国新疆ウイグル族の事例から—

熊谷 瑞恵\*

The Muslim who went to a Muslim Country:  
The Example of a Chinese Xinjiang Uyghur Living in Istanbul, Turkey

Mizue Kumagai

本論は、イスタンブルの中国新疆ウイグル族に注目し、ムスリムであるということが、かれらがトルコにおいて日々食べる、つきあうという営みにどのようにかかわっているのかを描き出し、それによって、これまで規範であるとなされてきたイスラームの位置づけを見直すことを目的とする。イスラームは、これまで多くの研究において規範として位置づけられてきた。そのため、ムスリムをめぐる調査は多く、礼拝、食事といった規範的行動への注目からなされてきた。本論は、イスタンブルのウイグル族に対する調査から、かれらにとってのイスラームが、行動を律する規範としてではなく、かれらひとりひとりを肯定し、そのふるまいを他者へと正当化する役割をもったものとしてとめられていることを描き出す。

This thesis focuses on the daily meals and relationships of an Uyghur of Istanbul and attempts to understand the meaning of being a Muslim in a Muslim country of different ethnicity, thereby intending to review the position of Islam, which has been considered a set of rules until now. Because Islam is so considered, numerous investigations concerning Muslims have been conducted which focus on actions in line with the rules, such as worship, clothes, and meals. This thesis indicates that for an Uyghur of Istanbul, Islam is not a set of rules but a source of self-affirmation and justification.

\*国立民族学博物館外来研究員

**Key Words** : Uyghur, Turkey, Islam, Halal, relations between ethnics

キーワード : ウイグル, トルコ, イスラーム, ハラル, つきあい

1 はじめに	2.3 あたりまえの日常生活
1.1 規範という理解——先行研究におけるイスラームの位置づけ	3 つきあいをいろどるイスラーム
1.2 ムスリムの描かれかた——礼拝・食事	3.1 家・男女・訪問者
1.3 調査概要	3.2 さけあう人びと
2 「規範」と人を結ぶもの	3.3 「ムスリム」のなすべきこと
2.1 「それには豚肉が入っている」——食事規定の内的機能	4 結論 かれらの社会性
2.2 隣人とのあいだにみいだされる知の様相	4.1 正しさのラベル
	4.2 社会性の輪郭
	4.3 イスラーム圏の類似

## 1 はじめに

### 1.1 規範という理解——先行研究におけるイスラームの位置づけ

本論は、イスタンブルの中国新疆ウイグル族に注目し、ムスリムであるということが、かれらがトルコにおいて日々食べる、つきあうという営みにどのようにかかわっているのかを描き出し、それによって、これまで規範であるとみなされてきたイスラームの位置づけを見直すことを目的とする。イスラームは、これまで多くの研究において規範として位置づけられてきた。そのため、ムスリムをめぐる調査は多く、礼拝、食事といった規範的行動への注目からなされてきた。本論は、イスタンブルのウイグル族に対する調査から、かれらにとってのイスラームが、行動を律する規範としてではなく、かれら個々人を肯定し、他者へと正当化する役割をもったものとしてあることを描き出す。

これまで、イスラームは規範としての知識とともに論じられてきた。大塚は、ヴァールデンブルグによる「公式 official」「民衆 popular」の枠組みによっておこなうイスラームの議論をめぐり、それが知識の豊富な学者と文盲の対比を示すものとして有効であること、ただしそこでは文盲の民衆であっても「唯一の真」(大塚 1989: 149)のイスラーム解釈を求めるものとしてあるととらえるべきであることを主張している。そして、そうした文盲の民衆による知識をのまないふるまいを「虚偽意識」と

してとらえる社会学は、こうした「唯一の真」をもとめる「ムスリムの主体的な世界認識」をとらえることはできないであろうと指摘している（大塚 1989: 149）。

こうしたイスラームを知識とその浸透としてみると同時に、大塚のように、その実態を「信仰心」といった曖昧といゆる概念に位置づける姿勢は以下の2点の研究にも共通してみられる。小杉〔麻〕は現場において礼拝の「誤り」をみつけた際、それは正しい知識を持った人物がやってくれば「正されることは容易に予想される」とし、それ以上の観察をおこなっていない（小杉〔麻〕 2007: 192）。そして、礼拝とは「神との対話」であり、その目的は一般信徒の知りえない「叡智」への接近であると結論づけている（小杉〔麻〕 2007: 203）。清水は、ヨルダンにおいて、村人が礼拝のような「ムスリムにとってもっとも基本的なこと」さえも知らず、知識は私のほうが上だとする一方で、村人の「信仰心」は本物であるために、かれらは自分よりも「十分ムスリム」であるとしている（清水 1992: 123-125）。

そして小杉もまた、知識からイスラームを位置づけるひとりである。小杉はイスラーム化という現象が中東にかかわらず南アジアでも、それ以外の地域でも、等しく生じた現象とみなすべきとし（小杉 2002a: 196）、中東を「あるべきイスラーム」「本場のイスラーム」とみなし、南アジアや東南アジアを「田舎イスラーム」とみなす研究者を「いったいどの地域に、地域の特徴を持たないイスラームが存在するのであろうか」（小杉 2002a: 193）と批判する。その小杉の視点は、イスラームを文字による知識とし、その地域性をないものとみなす姿勢であると同時に、地域の特徴をイスラームの2次的産物とみなしうる姿勢であるといえる。

これらの先行研究にみられる問題点は、知識としてのイスラームを出発点としているため、現場を起点として視点をたちあげる営みに欠けてきた点である。小杉の提示するイスラームの「政教一元論」（小杉 2006: 14）において、池内は、それがイスラームの「理想」と西洋の「実態」という異なるカテゴリーの対比によってなりたっていることを批判している（池内 2001）。また加藤は、小杉による「経教統合論」において、それが思想研究としては意味があるとしても、それが地域研究にも有効であるとする小杉の姿勢は、現地の諸相を読み取る上での解釈のはばを、前提からせばめるはたらきをするものであると批判している（加藤 2002: viii-ix）。

そしてヴァールデンプルグは本来、「公式」「民衆」の枠組みにおいて、イスラームではその「正しさ」を認知する資格は個人にそなわっているという点から、それを「公式」と「民衆」という分け方では論じることができず、「公式 official」より「規範的 normative」と論じるほうがより現地の実情に適していること、そしてそれはま

た地域、民族的単位と結びついた (Waardenburg 1979: 359)、預言者の存在よりまえに存在していた社会的枠組みとして (Waardenburg 1979: 352)、「宗教的」というより、人びとの生そのものと深く関わったものとして存在しうるであろうことを指摘している。こうしたヴァールデンブルグによる、イスラームをささえる基盤にイスラーム以前からの地域、民族の特徴をみいだす議論を大塚は「具体的な例をあげて綿密に議論を展開しはしない」(大塚 1989: 141) としりぞけている。こうした議論のありようが示すのは、現場が何を示しているのかを、規範を出発点とすることなく現地の具体性のなかからあらたにたちあげる必要性である。

## 1.2 ムスリムの描かれかた——礼拝・食事

ではこれまでムスリムという人びとのありようは、現場からはおもにどのように描かれてきたのか。それは、第1節に指摘したように、礼拝といった、規範からみた実態の描写によってなりたってきたと述べることができる (小杉 [麻] 2007)。大塚はスーダン村落における人生儀礼が、イスラームをめぐってどのように構成されているかについて説明している (大塚 1994)。桜井は日本に住む外国人ムスリムの実態を、礼拝場所としてのモスクの設立やムスリムとしての食糧の確保といった側面から描きだしている (桜井 2003)。清水はヨルダンの村の日常的な暮らしにみられる信仰形態について記録している (清水 1992)。これらの研究におけるイスラームは、何よりも規範的な行動からえがかれ (清水 1992: 122-124, 桜井 2003: 19)、そうした行動は「信仰心」との関連で論じられることで、宗教であるという以上の分析は加えられてくることがなかった。しかし、これらを含む民族誌的蓄積において興味深い点は、そうした規範的な行動と人びとの示す態度とのあいだには常にずれが認められてきたという点である。

たとえば日に5回の礼拝は、5行とよばれる信徒の義務において信仰告白の次に位置づけられる、ムスリムにとって「もっとも基本的なこと」(清水 1992: 123) とされている。しかしそのもっとも基本的な「義務」においてさえ、現場においては、必ずしも「義務」として一様にとらえられていないようよみとれる点が示されてきた。本多はサウディアラビアにおいて「Q氏はお祈りをしない。理由を聞くと「問題は精神であって、形式じゃない」と答えた。」(本多 1984: 147) ことを記録している。前川はクウェートにおいて現地のクウェート人が「お祈りは日に3回でもいい、とザハラはいつていた。」(前川 1991: 58) ことを記録している。中山はトルコの農村において「礼拝を完全に実行している人達は少ない」(中山 1999: 55)「歓談の途中に礼拝に立

ちあがる人はほとんどいない」(中山 1999: 55) ことを指摘している。そこには「もっとも基本的」とされる礼拝が、人びとに共通した「義務」としては認められえていない点を見いだすことができる。

こうした礼拝を、嶋田は「日中は高温になる熱帯で生活する人びとの生活は、朝早く始まるのがあたりまえである」として、自身のフィールドであるマリを事例に、それを気候的「合理」としてとらえることをこころみている(嶋田 2001: 71)。嶋田によるこの指摘は環境との結びつき礼拝を読み取ろうとしたものといえるが、これは夜こそアラブの活動時間であるとした片倉によるアラブの記述(片倉 1979: 25)、礼拝の直後、再び眠り込むという本多のアラブの記述(本多 1984: 50-51)には合致しない。片倉はこうした礼拝にみとめられるずれについて「人びとは、それぞれの生活の中に、なにげなく祈りを組み入れ、1人1人の生活のリズムを作っている」(片倉 1979: 185)としてぶれを内包した記述をおこなっている。片倉の記述にみられるのは、こうしたぶれのうえに問題点を認める姿勢の欠如である。

こうした規範と実態とのずれは、食事についても同様に確認される。桜井は「ムスリムが絶対口にしてはならないとされているものは、アルコール類とアッラーの御名を唱えずに殺した動物の肉である」(桜井 2003: 162)とし、同時に同じ著書内において「絶対」とされる肉に「どの程度配慮するかは、あくまでも個人の判断にゆだねられており、疑わしいものは一切口にしないという厳格な人から、餃子やラーメンを食べながらビールを飲むのが最高という人までいる」(桜井 2003: 164)としている。このムスリムと食肉の実態をめぐる点については、高橋も、トルコ人が「実はルーマニアで猪の肉を食べたことがあるのよ。これがおいしかったわようー。」(高橋 2002: 63)「ブタ? 海外では食べるよ。うまいよ。」(高橋 2002: 63)と話していることを記述している。そこに認められるのはやはり「絶対」と実態とのあいだのずれが確認できる点である。こうしたずれは、これまで「人間は弱いもの」(片倉 1991: 24)、「人間にやさしい法」(片倉 1991: 29)、「寛容な宗教」(清水 1992: 119)といったことばに内包され、問題化はみおくられてきた。

こうした「規範」と実態とのずれに対して、慎重な議論をおこなっているひとりが赤堀である(1997)。赤堀は、ベドウィンの死をめぐる儀礼の規範性の低さを指摘し、「最も確実な服喪の期間である最初の3日間においてさえ、課されるべき具体的な禁忌や忌避の内容、それが課されるべき人の範囲は不明確であり、逸脱に対する制裁はおろか、非難がおこなわれることさえあまりない。」(赤堀 1997: 206)として、「筆者の目には彼らの服喪の規範的性質の弱さが近年の社会変化にばかり由来するとは映ら

なかった」(赤堀 1997: 206-207) という, 「規範」から現場を論じることの違和感を指摘している。また中山は, トルコの農村において, 男女の区別といったイスラームの特徴とされてきた行為が, 明確にイスラームと結びつけられることなく成立していることから, そうした行為はイデオロギーの体現としてではなく「日常生活の実質に即した」 「情念」(中山 1999: 215) としてなりたっていることを指摘している(中山 1999: 215-217)。

イスラームが規範に従う行為としてはみいだせなかったという指摘は, カイロにおける政治運動を分析した大塚の記述にもみいだすことができる(大塚 1987)。大塚は, イスラームの政治運動に身を投じたエリートの着る「イスラーム的」(大塚 1987: 392)な服装が, 伝統とは異なる「近代的」なものといえ, そうした服装に対しかたられるイスラーム性とは, 個々のイスラームを「“主観的”に表現する記号」(大塚 1987: 394)にすぎず, そこにイスラームとしての「単一の“正統的”見解を導きだすことは容易ではない」(大塚 1987: 394)としている。そこにみられるのは, 研究者の見解と実態とのあいだのずれとともに, 目につきやすい規範的行動と社会とのあいだをつなぐ暮らしの意味がみおとされてきたという点である。こうした研究にもとめられているのは, 服装といった部分を含む, ムスリムであるということの意味, そしてその日常生活におけるイスラームの役割を明らかにすることであるといえる。

本論は, トルコに行ったウイグル族<sup>1)</sup>を対象に, ムスリムであるということが, かれらの日々食べる, つきあうという営みにおいてどのようにみいだすことができるかを分析する。ウイグル族は, タクラマカン砂漠のトルコ系のオアシス定住農耕民であった人びとである。かれらの「イスラーム化」は, 歴史的には10世紀後半から16世紀とされ(濱田 1995: 178), かれらは地続きで全民族的にイスラーム化した民族としては, 東端の民族にあたる。現在かれらは中国の少数民族のひとつであり, その生活には, さまざまな宗教的制限がかせられている<sup>2)</sup>。本論は, イスタンブルに移動したウイグル族に注目することで, かれらのムスリムとしてのありようをとらえる。そして同時に, そうしたありようが, トルコ人とのあいだにムスリム同士としてどのような関係性を生みだしているのかを分析する。

### 1.3 調査概要

イスタンブルは人口約1,400万の大都市である(Statistics and Maps on city Population: 2012)。イスタンブルのウイグル族人口は現地の機関によって2,000人強と語られていたが, ここには一時的な旅行者, 留学生, 買いつけ中の新疆およびイス

ラーム圏各国からきた商人、親族・友人宅に一時滞在するヨーロッパ諸国の国籍取得者<sup>3)</sup>、またこれらの身分を変更中の人びとは含まれていない。こうした個人へは、接触が困難であると同時に、かれらの集団の登録などはみいだすことができないこと、また中国国籍者の移動における民族別統計等も存在しないことから、その総体といったものの把握は現在不可能に近い。本論は、筆者が接触することのできた、比較的違いのある個人とそのつきあいのひろがりへの注目から、その一端を実態として示すことをこころみるものである。

イスタンブルにおけるウイグル族の居住地は、大きく2ヶ所への集中が指摘されていた。そのひとつがザイトウンブルン<sup>4)</sup> (ZEITINBURNU) 地区であり、もうひとつが国際空港裏手にあるサーファークョイ (SEFAKÖY) 地区である。このうちザイトウンブルン地区にはウイグル族同士の互助機関 (DERNEK)、2軒のウイグル食堂、ナン<sup>5)</sup> の販売所 (看板なし)、本の販売所 (店舗・看板なし) 等がみられる。しかしここがかれらの活動の中心地というわけではなく、実際には学校施設、食堂のいくつか<sup>6)</sup>、個人々の屋敷地<sup>7)</sup> は市中各所に分散している。

本論はイスタンブルに住む8人のウイグル族女性をめぐる調査結果をもとに、分析をすすめていく。かれらには便宜的にA～E<sup>8)</sup> のアルファベットをあて、論をすすめていく。本論が調査対象を女性とした理由は、筆者が女性であり、婚姻関係にない男女が同じ空間ですごすことを禁じるというイスラームの考えへの抵触を避けたためで

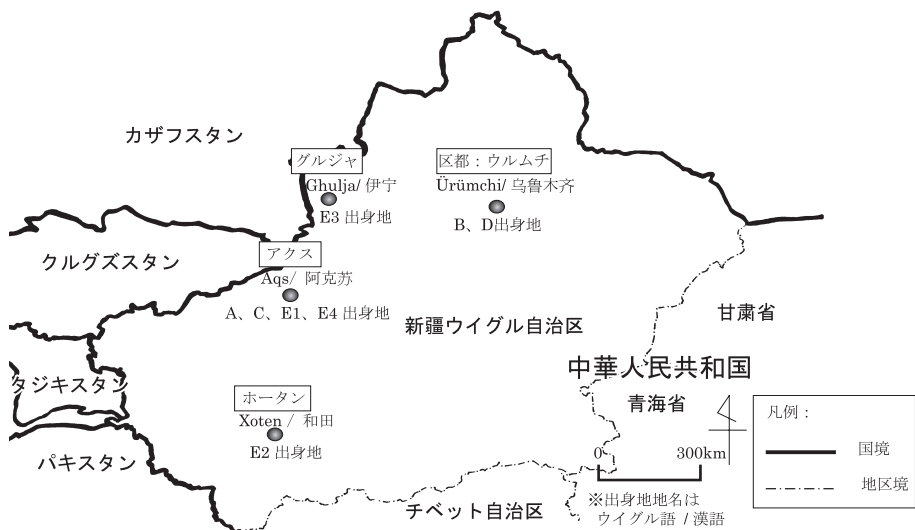


図1 新疆ウイグル自治区における調査対象者の出身地



ある。A～Eの女性は、トルコ訪問にいたる経緯や在トルコ年数がそれぞれ異なっている。そのため、かれらの生活経験にみいだされる共通点は、トルコにおけるウイグル族のんびとのありかたの共通点を示すものになると考えられる。A～Eについては、それぞれ新疆での出身地、婚姻状況、職業、学歴、トルコ訪問の経緯、現在の居住状況、礼拝の実施、外出時の服装から述べていく。また結婚している人物については、その夫についても述べ、あわせてのちの分析の参考としていく。なお各女性の新疆での出身地は図1、中国国内（新疆外）での就学・就職を経験した地については図2、イスタンブルにおけるA～Eの居住地は図3にそれぞれ示した。

Aは新疆アクス（図1）出身、34歳の既婚者で、3人の子供がいる。Aの末子は2010年調査時には0歳で、Aは育児中の主婦である。Aは中国南部珠海（図2）の大学出身で、在学中にイスラームとともに生きるべきだということを意識しはじめたという。卒業後は、他の学生達がヨーロッパへむかうなか、父親が「娘は父親と一緒にいるものだ」といったとの理由により、Aは先にトルコに行っていた父と兄を頼ってトルコにむかっている。そしてウイグル民族医（Tewip）<sup>9)</sup>であったという父の紹介にて、同じくウイグル民族医の人物と結婚、現在に至る。Aの住居は、2010年調査時にはザイトゥンブルン地区（図3:A宅三角※）からファティーフ（FATIH）地区（図

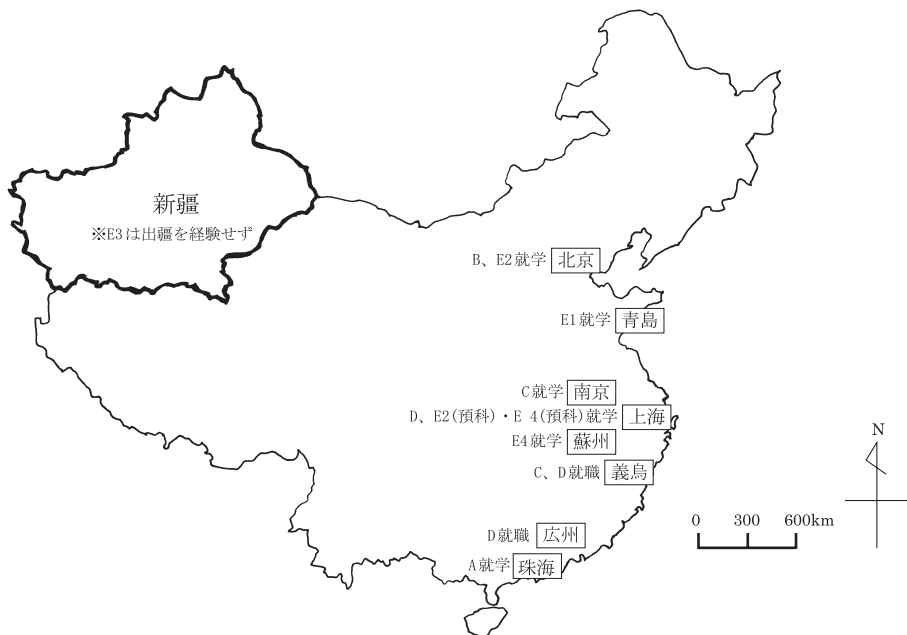


図2 調査対象者の中国（新疆外）における就学・就職経験地

3：A宅①四角と三角）のアパート1階に引っ越し、2012年調査時にはそこからさらにスルタンベイリー（SULTANBEYLI）地区のアパート2階に引っ越していた（図3：A宅②四角）。この移動の理由について、Aはザイトウンブルンでは「（ウイグル族同士の）話が多すぎる（gep jiq）」とその理由をかたっていた。Aのトルコ滞在は8年にわたっており、国籍も中国からトルコに変えて4年目である。Aは毎日礼拝をおこなう。Aは外出時には黒い長衣、色のあるスカーフを身につける。

Aの夫はウイグル民族医で、スルタンベイリー地区に薬品を販売する店舗を持つが<sup>10)</sup>、その他にも輸出入等さまざまな仕事をてがけている。2012年春には、単身メッカのウムラ<sup>11)</sup>をおこなっている。

Bはウルムチ（図1）出身、38歳の既婚者で、3人の子供がいる。ウイグル族の互助機関で教師をしている。Bは北京（図2）の大学出身、卒業後は新疆でジャーナリストとして働いていたが、妹の紹介で北京でイスラームとして自覚的に生きているというウイグル族の人物に出会い、自身もイスラームとして自覚的に生きることを決意、イスラームの勉強をしはじめ、同じように勉強をしていたウイグル族の男性と出会い結婚。その後新疆にて漢族とウイグル族の衝突事件があったことをきっかけに、夫、妹夫婦とともにパキスタンへ出国し、同国で2年間のイスラームの勉強の後、ト

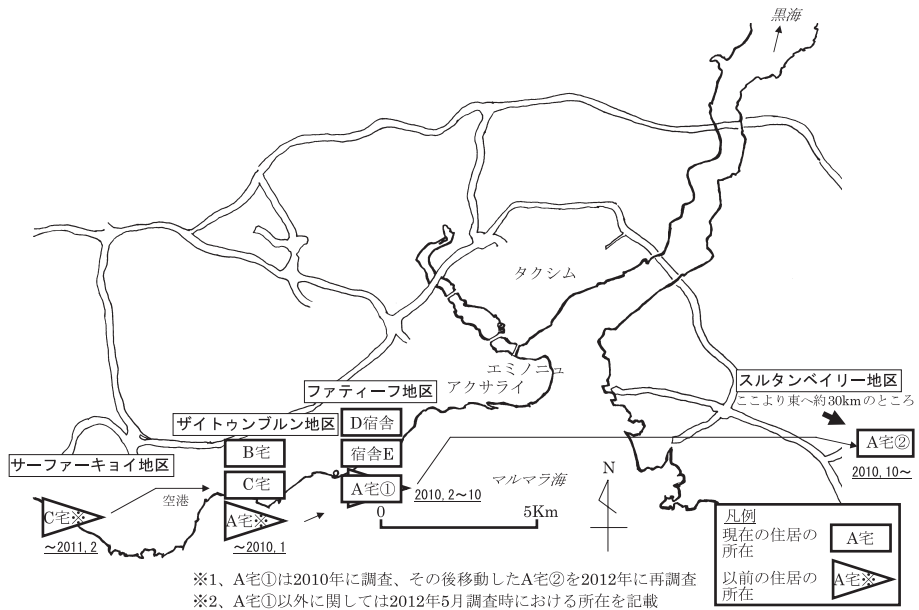


図3 イスタンブールにおける調査対象者の住居（移動過程含む）

ルコへとむかっている。途中実母をともなった数カ月にわたるサウディアラビアへのハッジを経て、現在もトルコ在住である。Bのトルコ滞在は10年にわたっており、国籍もトルコ国籍である。Bの住居はザイトウンブルン地区（図3：B宅四角）のアパートの4階である。Bは毎日礼拝をおこなう。Bの外出時の服装は黒い長衣と黒いスカーフ、ニカブ（顔覆い/Niqab 語源：アラビア語）である。

Bの夫はアラビア語の通訳をしている。かれは需要に応じて各地を飛び歩く生活をしており、筆者は、B宅ではかれがいないあいだのみ滞在を許されていた。

Cはアクス（図1）出身、29歳の既婚者で、3人の子供がいる。この3人の子らは年子で、かつ筆者の調査時は3人目の子が出産直後で、Cは子育て中の主婦である。Cは南京（図2）の大学出身、在学時に宿舎の漢族学生に「あなたはイスラームだというけれど、イスラームとは何か」と問われ、豚肉を食べないことだと答えた。それがイスラームなのかと再度問われ、自分で考えた結果、在学中にスカーフを結びはじめたという。Cは卒業後、北京の大学の学生だったウイグル族の友人を頼り、ひとり浙江の街義烏（図2）にむかっている。この友人が、D（後述）とも共通の友人で、Cは広州へ行ったというDの後任としてソマリ人の商売の手伝いをしはじめる。のち同地（義烏）でウイグル族によるパソコンを売る仕事の手伝いをしはじめ、2007年10月に、サウディアラビアからパソコンを買いにきたという夫となるウイグル族の人物と出会い、1月に結婚、出国。Cは、夫がサウディアラビアにいるというのでなければ、出国するなどということは考えてもいなかったという。Cはその後、ドバイを経由してサウディアラビアにむかい、2008年から2年にわたり当地に住む。しかし、夫の仕事のトラブルが原因で、2010年よりトルコに移動したという。Cのトルコでの住居は最初サーファーキョイ地区（図3：C宅三角※）にあったが、後に仕事仲間の引っ越しにより住居のあきができたため、現在のザイトウンブルン地区（図3：C宅四角）のアパートの5階に移動している。Cのトルコ滞在期間は調査時点で約1年で、国籍は中国のままである。Cは毎日礼拝をおこなう。Cの外出時の服装は、黒い布で全身をすっぽり覆うジェルバップ<sup>12)</sup>（Jérbap）とニカブ（顔覆い）である。

Cの夫は、12～3歳頃中国を出て、パキスタン等で勉強、ドバイの大学でイスラーム法学部を卒業した人物である。この学歴により筆者は、Cとその夫にみるイスラームには特に注意をはらった。Cの夫は卒業後、ドバイのモスクで約3カ月間イマームを経験したが、のちに商人に転身、サウディアラビアにて商売をしていたが、トラブルにあい、イスタンブルに移動、現在はイスタンブルの週バザールを巡回する路上でのアクセサリ販売をしている。筆者が、Cの夫の学歴はあまり職業にいかせてない

のではと聞いたところ、Cはいかせていないといいながら「自分のために使い、私にも教えてくれる」と言っていた。このことはイスラームの学歴と社会的地位とが実態としても考えとしてもあまり結びついていないようにみられたという点で、興味深く思われた点である。

Dはウルムチ（図1）出身、29歳独身で、トルコ語の研修をしながら、大学進学準備をしつつ、ウイグル族の会社で通訳（漢語・英語）の仕事をしている<sup>13)</sup>。Dは、Bと同じく、外部での仕事についている女性といえる。Dはもともと筆者の2001年から2002年にかけての新疆における調査時のインフォーマントのひとりであり、Dが新疆大学の預科<sup>14)</sup>学生であった頃、筆者はDから調査上の大きな助力をえていた。この頃のDは礼拝や着衣といった点での宗教的な行為をまったくしていなかった。Dはその後、上海（図2）の大学に進学、英語を学び、卒業が近い頃からだんだんと礼拝、スカーフをしはじめるようになったという。卒業後、インターネットでムスリム同士の仕事があるということ調べ、1人浙江の街義烏（図2）へむかっている。そしてそこでソマリ人の商売の手伝いをする。筆者はこの頃のDに会い、長衣、スカーフというこれまでにみたことのない姿をしていたDに驚かされたことがあった。Dはその後、ソマリ人らの広州（図2）での仕事も手がけるが、後に仕事を切り上げ、新疆に戻り結婚。しばらくウルムチで英語の教師をしていたが、トルコでは奨学金で勉強ができるという情報を得て、出国を志す。Dの夫となった人物もともに出国することを考えていたが、後離婚、単身トルコにわたっている。Dは、ファティーフ地区（図3）のアパートの4階で、13人のトルコ人女性との共同生活をしている（図3：D宿舎四角）。Dのトルコ滞在は1年半である。国籍は中国のままである。Dは毎日礼拝をおこない、外出時には短衣と色のあるスカーフ、あるいはブラウスと長いスカートを身につける。

宿舎E（E1~5の住む）は、ファティーフ地区（図3：宿舎E四角）の一般のアパート3階の1室である。この部屋は国際的な学生支援をおこなっているトルコ系ワクフ<sup>15)</sup>のひとつが所有するもので、同機関から支援をうけて生活するE1からE5の5人のウイグル族の学生が住む。かれらは全員が独身である。

E1はアクス（図1）出身の28歳、イスタンブルの大学の修士課程に在籍中である。中国では青島（図2）の大学卒業、専攻は土木工程管理で現在も同じ専攻だという。E1のトルコ滞在は2年にわたっている。E1は毎日礼拝をおこない、外出時には短衣とズボン、色のあるスカーフを身につける。

E2はホータン（図1）出身の24歳、上海（図2）の大学に4年（預科）、北京（図

2) の医科大学に5年在籍し、鍼灸を専攻していた。E2がトルコに来た理由はビザがとりやすかったからで、トルコでは専攻の鍼灸をさらにかす勉強ができればとかがたっていた。調査当時E2はトルコ語の研修をうけながら、大学受験の準備中であった。E2も大学の卒業が近くなった頃からショールをかぶりはじめたとかたっていた。E2のトルコ滞在は6ヶ月目である。E2は毎日礼拝をおこない、外出時は短衣とズボン、色のあるショールを身につける。

E3は、ゲルジャ(図1)出身の24歳、E3の学歴は地元の高卒卒業で、調査対象者のなかでは唯一大学進学をしていない。E3もE2同様トルコ語の研修を受けながら、大学受験の準備中である。E3のトルコ滞在は6ヶ月目である。E3は毎日礼拝をする、外出時には特にスカーフや体の線を隠した着衣等はない。しかしE3は、宿舎Eのなかではもっとも念入りに日々の礼拝をおこなう人物で、いつも洗浄<sup>16)</sup>に30分ずつの時間をとり、礼拝の際には他の人びとが裸足でも靴下を履き、他者の家に行った時など、洗浄の環境や靴下等の衣服が整わない場合には礼拝をしなかった。このように周囲に比べて礼拝には独自の方法をとっていたといえるE3であったが、他者の家でひとり礼拝をしないE3の姿は、そのいつときのみをみれば、長衣、スカーフを身につけず、礼拝もしないという、宗教的なことにかまわぬ人物にもみえかねなかった。その意味で、衣服、スカーフ、礼拝といった表象とかれらのイスラームとは、あまりかかわりがないと思われた点である。

E4はアクス(図1)出身の25歳、上海(図2)の大学に4年(預科)、蘇州(図2)の大学に5年間在籍し、卒業と同時にトルコに来ている。専攻はE2同様鍼灸である。E4もE2、E3らとともにトルコ語の研修を受けながら、大学受験の準備中であった。E4のトルコ滞在は6ヶ月目である。E4は礼拝をせず、スカーフや体の線を隠した着衣等もしない。

E5は筆者の調査期間の終盤に新疆から帰ってきたイスタンブールの大学の大学院生である。専攻は英文学である。E5のトルコ滞在は3年目である。E5は毎日礼拝をする、外出時には特にスカーフや体の線を隠した着衣等はない。

こうしたA～Eのトルコ語会話能力について述べると、E2、E3、E4の3人がややたどたどしかったことを除けば、AからE5にいたるまでほぼ不自由なくトルコ語を話していた。Bの階下に住んでいたウイグル族女性(既婚)によれば、ウイグル族は、トルコには3ヶ月程度いれば、学校に行かなくとも大概のトルコ語はわかるようになるのだという。

またA～Eと筆者とのつながり、かれら同士のつながりについて述べると、かれ

らは筆者との関係において、大きく3つにわけることができる。Aは、筆者がエジプト滞在時に現地のウイグル族の人物に紹介されて知り合った人物で、AとB～Eとのあいだにつながりはない<sup>17)</sup>。Dは前述のとおり、新疆にいたときからの筆者の友人でありインフォーマントである。BはDが学業支援をうけている機関の人物で、CはDの友人の友人である。DとB、Cとの関係はトルコにきてからはじまったものであり、筆者はB、CとはDをとおして知りあった。宿舎Eの人びとは、筆者の調査期間中盤での滞在場所探しの際に、国際的に援助活動をしているトルコ系ワクフの紹介によって知りあった人びとである。かれらは、そのほとんどが中国の大学を卒業したばかりの学生で、かれらとA～Dのあいだにつながりはない。例外はE1で、E1は現在のDの職場におけるDの前任をつとめていたことから、Dとは今でも友人関係を継続している。E同士では、E2とE4とが上海での在学時からの友人同士であったことを除けば、イスタンブルに来てから知り合った者同士である。このように、かれらの関係は、A、B～D、Eとの3つにわけられ、かれら同士の関係も近くない。

またかれらとイスラームをめぐってひとつまとめておくことのできる点として、AからD、E2にいたる5人が、共通して大学卒業前後における「イスラームへの目覚め」に類することをかたっていたことがあげられる。A～Eの女性たちは、E4を含め、すべてムスリムとしての自覚がある人物であったが、そうした自覚はトルコに来たことを契機に変化したわけではなく、また生まれた環境によってあたりまえに身につけられてきたわけでもない。かれらは、中国ですごしているうちに、自発的に変化をおこしているのである。このことは、生まれたときからムスリムであるはずのかれらが「イスラーム化」という認識の転換点をもっている点で興味深く、またそれが、かれらが社会にでていく大学卒業前後に集中していることから、イスラームとは、なんらかの社会性と結びついた価値をもつことを示唆していると思われた点である。

本論の調査期間は、2010年2月1日～3月19日、2012年5月22日～9月19日の約6カ月である。調査方法は聞き取りと参与観察である。調査時の滞在は、可能な限り住み込みでおこなった（Dはムスリム以外の長期滞在が許されない宿舎に住んでいたため、近隣からの通いでおこなった）。調査言語はウイグル語である。

ウイグル語の表記はアラビア文字であるが、本論のウイグル語表記はコンピューター上でのウイグル語表記方法 UKY (Uyghur kompyutér yeziqi) をもちいておこなった。またトルコ語との区別のために、ウイグル語は頭文字を大文字、それ以外は小文字で、トルコ語は大文字のみで表記した。また本論のウイグル語は単語を『Uyghur tilining izahliq lughiti : ウイグル語詳解辞典』(Ekbar 1999)、トルコ語は『2010 Student

Dictionary English-Turkish / Turkish-English,』(Yurtbaşı 2010)を参照した。また、本論における語源の記載はすべて『Uyghur tilining izahliq lughiti : ウイグル語詳解辞典』に依拠している。

なお、筆者は調査をスカーフ、短衣等を着用しておこなったが、筆者はイスラームを信仰していない。そのため本論の観察は、異教徒の立場でおこなったものであり、聞き取りの内容にみられる特徴もその立場であらわれたものとなっていることを付記しておく。

## 2 「規範」と人を結ぶもの

本章から現地のデータの提示とその分析をおこなっていく。ここではイスラームの規範のなかで、もっとも日常的な行動規範のひとつである食事をめぐる点から確認していく。

### 2.1 「それには豚肉が入っている」——食事規定の内的機能

ムスリムが口にできる食べ物を、「ハラール食品」という。それは「イスラーム法的に合法的な食品」を指し、そのおもな言及対象は屠畜方法をめぐる肉および肉製品に関してであることが指摘されている(小杉 2002c: 785)。そのため、屠畜者もムスリムで構成されるイスラーム圏では食品がハラールであるかどうかが問題になることはほとんどなく、問題が発生するのは、ムスリムの非イスラーム圏への移住、または非イスラーム圏からの食品輸入の増加によることが指摘されてきた(小杉 2002c: 785, 桜井 2003: 104)。

ウイグル族はムスリムである。ゆえに、かれらのやってきた国トルコは、人口のほぼすべてがムスリムであるため、かれらには食べ物の問題はほとんど発生しないことが推測できる。しかし、実際には、かれらの暮らしにおいて、しばしば“これはムスリムの食品か？(Bu musulmanchimu?)”“豚肉が入っている(Tongguzning göshi bar.)”ということばが聞かれた。それがどのような状況でいわれたことばであったのかを、まずA宅での事例から確認していく。

事例 2-1 : A 宅 : 筆者が朝食づくりをまかされていたとき、筆者がトルコ訪問前に立ち寄ったエジプトで購入した粉ミルクを温くしてだしてみた。するとこれは何だと問われる。エジプトの粉ミルクだというと、A と A の夫を含む全員 (A と A の夫、ウ

熊谷 ムスリムの国へ行ったムスリム

ルムチから来たウイグル族女性1人，クルグズスタンから来たウズベク族女性2人）が動作を止め，Aの夫が「“これはムスリムの食品か？（Bu musulmanchimu?)”」ということばを発した。

事例2-2：A宅：筆者が朝のサラダ<sup>18)</sup>づくりをまかされていたとき，トルコ航空の機内食からもってきた塩胡椒を使ってみたところ，食卓でAに「うちに胡椒はなかったはずだが」といわれる。筆者が「トルコ航空のものを使ってみた」というと，Aに「“私たちはそんなものがムスリムの食べ物であることを信じない（Biz ashundaq nersening musulmanchini ishenmeymiz.)”」といわれる。

事例2-3：A宅：テレビをみていたとき，ソーセージのコマーシャルに対し，Aが「“これはムスリムの食べ物ではない。めちゃくちゃな肉を使っているからだ。なかには豚の肉も入っている（Qalaymiqan gōshini saldighan, ichde tongguzning gōshi bar.)”」という。どこからそれを知ったのかと聞くと「“人からそう聞いた（Bashqalardin anlidim.)”」という。

事例2-1, 2-2, 2-3には，特に事例2-1において，筆者がまず，アラビア語のパッケージにつつまれたエジプト製粉ミルクを，“ムスリムの国の品物”として強い信頼をよせていたことがあげられる。事例2-2にも共通する筆者のこのふるまいは，イスラーム圏で生産された食品は，ムスリムが食べられるものであると考えた，筆者の思い込みによって成り立っている。そのうえ事例2-2は，塩胡椒という，およそ「ハラール」の問題になるとは考えられないと思われた食品についてのやりとりである。こうした点から見て，事例2-1, 2-2にてまず指摘できるのは，かれらがここで問題にしているのは，屠畜方法をめぐる「ハラール」ではないと考えられる点である。そして事例2-3は，トルコのテレビ・コマーシャルの食品に豚肉が入っているとの指摘がなされた事例である。これは，トルコのほとんどの人口がムスリムである以上，あまり考えられないことと思われた。Aのかたわらにてこれらの事例に遭遇した筆者は，はじめ，A宅の人びとはかわった人たちなのだろうかと考えた。しかしこのことが，筆者がかれらの立場をとらえきれていないことによるということに気づいたのは，C宅でほぼ同様の事例を耳にしたときであった。

事例2-4：C宅：C宅を訪問する際，筆者はDにより肉を土産に持って行くようにと



のアドバイスを受けていた。そのため筆者は一羽分の鶏肉、そしてB宅やDの職場でも食べられているのを確認した大手チェーンスーパー製の菓子（ウエハース）を購入していった。その菓子はしばらく手をつけられないままおかれていたが、ある日Cによって夫にだされた。夫はおいしいとあって、どうした菓子かをCにたずねた。Cは、筆者が買ってきたものだといった。すると夫は、Cに菓子包みをもってこさせ、それを点検したという。それをそれとなく隣室で聞いていた筆者は<sup>19)</sup>、のちにCに何かあったのかと尋ねたところ、Cは、実は今までC宅では、トルコではα社製の食品以外は買わないようにしていたのだということを教えてくれた（実際に、それまでC宅で見えていたビスケット、果汁等の食品は、すべてα社のものだった）。α社は古いメーカーだから信頼がある。だから少し高いが食品はα社のもののみを買うようにしていたという。そしてα社以外の食品には「豚の骨（Tongguzning sōngeki）」が入っているから、といった（2012年6月27日）。

事例2-4では、筆者側のとった行動上の注意点のひとつとして、筆者が事例2-1、2-2、2-3の件をふまえ、たとえかれらがいくつかの食品を信用していないのだとしても、現地ウイグル族の知り合い同士が食べているものを選べば、それは許容された食べ物になるだろうと考えたことがあげられる。筆者は想定される社会性の範囲の縮小をこころみたと見える。それに対するCとCの夫の姿勢にみられるのは以下の点である。まず1点目は、かれらによる「豚の骨（Tongguzning sōngeki）」ということばは、かれらの食品会社に対する不信があらわされたものである可能性があるということ点である。このことばは、もし社会的な事実を述べたものであるとすると、トルコという「イスラーム社会」にとって問題であり、同時にトルコの他のムスリム、そしてウイグル族も食べているものに対することばとして、かれらは、隣人がムスリムであることに対して社会性に欠けた発言をしていることになる。しかし、ここにはトルコ社会にも、そうした隣人への配慮も、そのどちらもみいだすことができない。その意味で、2点目の特徴として、このことばから感じ取ることのできる希薄な社会性という点を指摘することができる。

筆者はまた、事例2-4の会話内容をDに伝えた。それは、事例2-4にも示した通り、買っていった菓子が、Dも食していることを確認して持っていったものであったからである。このことばが事実であるとするれば、Dは「豚の骨」を食べていたということになる。しかしDは「自分は豚を食べていたのか?」といった反応や、「Cは考え過ぎだ」といった反応をすることもなく、「そのとおりだ、私たちは皆そうして食べ物

に気をつける (Ashundaq, biz hemmimiz ashundaq yémekke diqqet qilmiz.)”と答えた。そしてDは、その後もそうした菓子類を食べつつも、贈答の際などには、 $\alpha$ 社の商品は信頼があるから選らんだのだ、などと意識して $\alpha$ 社の製品を買っていくようになっていた。そうしたDの反応から示されるのは、人びとの行動は、やはり「豚肉」を食べる食べないという「規範」とそこからの「逸脱」をもとにして考えられたものではないと考えられる点である。Cのことばは、食品会社にむけた不信を、社会性とは乖離した状態でことばにしたものと考えることができる。そしてDの姿勢もまた、そうしたCの不信を、筆者を経由して、やはり個人的に学習しつつあったものとして考えることができる。そうした不信は、同じウイグル族のあいだであっても示される。

事例 2-5：C宅：Cがザイトウンブルン地区にあるウイグル・レストランのひとつについて、「 $\beta$ レストランは、酒を飲む輩が来る場所だから、夫が“ムスリムの…(※食べる場所)ではない (Musulmanchi emes)”といていた」という(2012年6月30日)。

事例 2-5は、飲酒という、コラーンの記述をめぐる判断を示したものとはいえるが、Cの夫のもちいた「“ムスリムの…ではない (Musulmanchi emes)”」ということばは、日本で考えられてきた「ハラール食品」といったことばに還元されうる、肉やその成分を示す社会的なラベル、つまり社会的な基準値を指しているのではないという点は、これまでの事例と同様である。つまりCの夫による「ムスリムの…ではない」ということばは、そのレストランの“営業停止”や他のムスリムの来店を阻害するといった公共的な問題とはかかわりあいが無いことは明白なのである。かれらが食べ物を拒否するときに見られるこうした社会性との乖離は、イスラームが特に言及されない場においてもみることができた。

事例 2-6：C宅：TVで子供向けのアイスクリームのCMを見ながらCが「“かれらは金さえためられればそれでいいのだ。かれらは清潔に作業をしているのか、そうでないのか、それを知ることなどできはしない。私の母は、私が小さい頃から工場で作られたものを子供に与えないようにしていた。(食べ物は)自分の手でつくったものもいいのだ (Ular pul tapsa bolibridu. Ular pakizmu? Emesmu? Bilgili bolmaydu. Apammu kichikidin tartip zawutta ishlegen nersilerni bermeytti. Üzning qol bilen etken nersiler yaxshi.)”」(2012年6月27日)

事例 2-6が示しているのは、Cが介在する他者の行動を把握することができないと

いうことを理由に、テレビの宣伝する食べ物の拒否をしていることである。そしてここからは、そうした既製品を拒否する態度が、新疆で暮らしていた時からCとその周囲にすでにそなわっていたものとしてあったということを推測することができる。

イスラームの食事規定は、誰にも共通の「規範」としてあるようにみえながら、人びとのあいだでは、人びとの社会への不信を示すものとしてみいだすことができた。人びとはエジプトというイスラームの国を信じないことばを發し、食品をあつかう企業を信じないということばを發し、テレビや同じウイグル族による食堂を信じないということばを發する。そうした不信はウイグル族を含めあらわされることで、結果として、人びとの食べる環境を近い知り合い同士のあいだにせばめる結果をもたらしているのではないだろうか。

## 2.2 隣人とのあいだにみいだされる知の様相

第1節では、食品をめぐるかれらに言及されるイスラームが、人びとの不信と直結したものである点を確認してきた。そこでは工業製品に類する社会的な製品の多くが信頼に値するものとはみなされておらず、またその根拠が社会的に問われることもなかった。このように社会性と乖離して形成される知識のかたちは、食品にかぎらず示されるものとしてあった。

事例 2-7：カディル・ゲジェスィー KADIR GECESI<sup>20)</sup> について：E2, E3, E4, 筆者、かれらの友人 2 人（以下 E 友人①, E 友人②と表記）の 6 人で、レストランにて断食の日の夕食をとっていた際、カディル・ゲジェスィーをどうすごすかという話題になった。E 友人①が筆者に、カディル・ゲジェスィーとは、ラマザン<sup>21)</sup> 最後の 10 日のなかの奇数日のうちの 1 日を指すということを教えてくれる。その日については“アーリム<sup>22)</sup> 達が 27 日だと予想したようだが、はっきり分かるものではない (Alimlar 27-küni dep perej qiptu. Lékin éniq emes.)” という。E 友人①は、それは最後の 10 日のなかの奇数日であればいつでもいいことだという<sup>23)</sup>。そして彼女らは同じ席で、昨日がその夜ではないかと走り回っていた子らもいたということを話していた（2012 年 8 月 20 日）。

事例 2-7 が示しているのは、かれらが「アーリム」というイスラーム知識人のことばを、信頼し依拠すべき情報源としてはいないことである。ラマザンをめぐる情報を書いた紙はさまざまところから配布され、事例 1 を話していたレストランの食卓の

ビニールシートの下にもラマザンのすべての礼拝時刻、日程等が記された紙がはさまれていた(図4)。そこにはカディル・ゲジェスイーの期日に関する27日であるとの記載がなされていたが、そうした印刷物の記述も、かれら(とかれらの話していた子ら)は依拠する対象にはしていなかった。

www.dilek.com.tr

## 2011 İSTANBUL İLİ RAMAZAN İMSAKİYESİ

HICRI AY	MİLADI AY	GÜN	İMSAK	GÜNEŞ	ÖĞLE	İKİNDİ	AKŞAM	YATSI
01 RAMAZAN	01 AĞUSTOS	PAZARTESİ	04:06	05:52	13:18	17:10	20:30	22:08
02 RAMAZAN	02 AĞUSTOS	SALI	04:07	05:53	13:17	17:10	20:29	22:06
03 RAMAZAN	03 AĞUSTOS	ÇARŞAMBA	04:09	05:54	13:17	17:09	20:28	22:05
04 RAMAZAN	04 AĞUSTOS	PERŞEMBE	04:10	05:55	13:17	17:09	20:27	22:03
05 RAMAZAN	05 AĞUSTOS	CUMA	04:12	05:56	13:17	17:09	20:26	22:01
06 RAMAZAN	06 AĞUSTOS	CUMARTESİ	04:13	05:57	13:17	17:08	20:25	22:00
07 RAMAZAN	07 AĞUSTOS	PAZAR	04:15	05:58	13:17	17:08	20:24	21:58
08 RAMAZAN	08 AĞUSTOS	PAZARTESİ	04:16	05:59	13:17	17:07	20:22	21:56
09 RAMAZAN	09 AĞUSTOS	SALI	04:18	06:00	13:17	17:07	20:21	21:55
10 RAMAZAN	10 AĞUSTOS	ÇARŞAMBA	04:19	06:01	13:17	17:06	20:20	21:53
11 RAMAZAN	11 AĞUSTOS	PERŞEMBE	04:21	06:02	13:16	17:06	20:19	21:51
12 RAMAZAN	12 AĞUSTOS	CUMA	04:22	06:03	13:16	17:05	20:17	21:49
13 RAMAZAN	13 AĞUSTOS	CUMARTESİ	04:24	06:04	13:16	17:04	20:16	21:47
14 RAMAZAN	14 AĞUSTOS	PAZAR	04:25	06:05	13:16	17:04	20:15	21:46
15 RAMAZAN	15 AĞUSTOS	PAZARTESİ	04:27	06:06	13:16	17:03	20:13	21:44
16 RAMAZAN	16 AĞUSTOS	SALI	04:28	06:07	13:16	17:03	20:12	21:42
17 RAMAZAN	17 AĞUSTOS	ÇARŞAMBA	04:30	06:08	13:15	17:02	20:10	21:40
18 RAMAZAN	18 AĞUSTOS	PERŞEMBE	04:31	06:09	13:15	17:01	20:09	21:38
19 RAMAZAN	19 AĞUSTOS	CUMA	04:33	06:10	13:15	17:01	20:08	21:37
20 RAMAZAN	20 AĞUSTOS	CUMARTESİ	04:34	06:11	13:15	17:00	20:06	21:35
21 RAMAZAN	21 AĞUSTOS	PAZAR	04:36	06:12	13:14	16:59	20:05	21:33
22 RAMAZAN	22 AĞUSTOS	PAZARTESİ	04:37	06:13	13:14	16:58	20:03	21:31
23 RAMAZAN	23 AĞUSTOS	SALI	04:39	06:14	13:14	16:58	20:02	21:29
24 RAMAZAN	24 AĞUSTOS	ÇARŞAMBA	04:40	06:15	13:14	16:57	20:00	21:27
25 RAMAZAN	25 AĞUSTOS	PERŞEMBE	04:41	06:16	13:13	16:56	19:59	21:25
26 RAMAZAN	26 AĞUSTOS	CUMA	04:43	06:17	13:13	16:55	19:57	21:23

KADIR GECE Sİ

27 RAMAZAN	27 AĞUSTOS	CUMARTESİ	04:44	06:18	13:13	16:54	19:55	21:21
28 RAMAZAN	28 AĞUSTOS	PAZAR	04:45	06:19	13:13	16:54	19:54	21:20
29 RAMAZAN	29 AĞUSTOS	PAZARTESİ	04:47	06:20	13:12	16:53	19:52	21:18

**30 AĞUSTOS SALI RAMAZAN BAYRAMININ 1. GÜNÜDÜR. / BAYRAM NAMAZI 07:10**



**REZERVASYON**

★AYKOSAN: 0.212 671 83 33      BEYOĞLU: 0.212 292 77 67      BEYKENT : 0.212 855 44 99  
 ★SEFAKÖY: 0.212 580 78 60      ★FATİH: 0.212 534 45 26      İKİTELLİ O.S.B: 0.212 549 24 04  
 ★BAŞAKŞEHİR 1. ETAP: 0.212 485 57 87      ★YAKUPLU: 0.212 875 65 67      ★KOCAMUSTAFAPAŞA: 0.212 588 06 62  
 ★BAŞAKŞEHİR 4. ETAP: 0.212 487 15 00      BAKIRKÖY: 0.212 570 55 70      ★FORUM İSTANBUL : 0.212 640 03 15

İSPARTAKULE ve BAĞDAT CADDESİ ÇOK YAKINDA HİZMETİNİZDE...

MENÜMÜZ YILDIZLI (★) ŞUBELERİMİZDE GEÇERLİDİR...



図4 ある菓子店の配布していたラマザンの日程表

事例 2-8：ラマザンの開始日時について：

7月22日：筆者がDに断食はいつ始まるのかと聞くと、「“29日からだろう (29-künighu deymen.)”」という。だがDは同日、Cに電話した際に「断食はいつから始まるのか？」と聞いていた。Cは「“29日か30日のあたりだろうと思う (29-künidin 30-künining etrapghu deymen.)”」と答えていたという。

7月27日：5日たって、筆者が再度Dに聞くと「30日からだろう (30-künighu deymen.)”」という。

7月30日：3日たって、筆者とDがDの宿舎のトルコ人達と散歩にでた際<sup>24)</sup>、Dがトルコ人にラマザンは明日からだろうかと聞いていた。  
トルコ人は「明日の夜からだ」と答えた。

8月1日：ラマザン開始 (Dも)。

事例 2-8 が示しているのは、Dが、7月下旬の時点で、ラマザンがいつ始まるのかを「知らず」、*「間違っただちにち」*をいっていることであり、それをDに聞かれたCも*「間違っただちにち」*をいっていることである。しかし、結果としてDは周囲とのすりあわせをおこないながら、*「正しい日にち」*によって、ラマザンを開始している。

筆者はラマザンの開始日程をインターネットにて「調べ」、それが「8月1日」だと「知って」いた。また、こうした「期日」は、前述したように食堂等でみられる印刷物等によっても確認することができた (図4)。だが、DもEの人びとらと同様、こうした印刷物を目にしていたが、依拠する対象にしていない。Dが参照していたのは自分の近くにいた「誰か」であった。そしてそうした「誰か」からの情報もDの行動を固定化して律するものとはなっていなかった。Dは、当該のことをなすそのときまで、情報のすりあわせを続けていた。このように、「正しい知識」がどこかにあるとはみなさず、身近な「誰か」とのあいだですりあわせをおこないながらおこなうべき行為を取捨していくということは、第1節で示した、社会には不信の目を向け、近くの誰かの意見を参照しながら食品を選びとっていた人びとのありかたと一致したものとして指摘することができる。こうした情報への依拠のしかたは、スカーフの着用といった点におよんでみられた。

事例 2-9：異教徒の前ではそれが女でもスカーフをすべきであるということ：

Cがムスリムの女は異教徒の前では女の前でも男の前でいるようにスカーフをしていなければならないといい、実際に筆者の前でそうしていたという話を筆者がDにす

る(7月1日)。その後、筆者が、機会があってDの宿舎に泊りに行った際(7月9日)、Dの宿舎の女性および、Dらの多くが不自然なまでに筆者の前でスカーフを外さないということがみられた(意に介さず、スカーフをしていないトルコ人女性もひとりみられた)。スカーフを外さないのは“女でも異教徒の前では男の前にいるように”とCがいていたとした前回の話のせい、宿舎の人たちにもその話をしたのか、とDにいうとそうだという。その話をしたCとは、「暑くてもあなたという非ムスリムがいるから、私はしないでもいいスカーフをし、袖の長い服を着ていた、そうでなければ肌を出した服装で、気楽に歩いていられたのに！」と、なかばケンカごしでおこなった会話であったことを思いだし、筆者はこの宿舎を気楽ではいられない場所にする人間として来たというのか(それと同時に“筆者は男か?! 筆者がかれらの頭をみるとどうかなるとでも…”という倒錯を感じた)、といい「来なければ良かった」と言い争いをする。出ていく、出ていかない、とひと悶着した後、筆者は目のうえにスカーフをしぱりつけて寝る。朝になっても、筆者は「この“男”は何も見ることはないからどうか気楽でいてください」とスカーフを外さないままでいると、Dおよびトルコ人女性らがうろたえ、「目隠しを外して、これは私たちの決定だから(英語)」といってくる。「多分異なる学派の意見や異なるアーリムの意見なのであろう。私たちはそれを学ばなければならない。ひとりのひとに聞いただけで何かを決めないでほしい。とにかくもう目隠しは外してほしい(英語)」といわれる。筆者は、こわごとスカーフを外し、直目でかれらを見る。この日以来、彼女らが筆者の前でスカーフをしてすごしているということはなかった(2012年7月10日)。

事例2-9にみいだすことができるのは、まず1点目に、事例2-8にもみられたように、やはり“誰かに聞いた”ことがかれらにとっての主要な情報源になっていること、2点目にそうして得られた情報としての「規範」が、「逸脱」を適用されるような集団にとっての「規範」にはなっていないこと(集団のなかでスカーフをしていない人物がみられたこと)、3点目にそうした「規範」が、実質的な効果とはかかわらずに実行にうつされ(筆者がかれらの頭をみてもどうにもならない)、それが「知らねばならない」ということを根拠に、とり上げられうるものとしてあったということである。そこには、あるべきただひとつの理想を頑強に体現しようとする人びとの姿をみいだすことはできない。

かれらはアーリムに従わず、公共にでまわる情報を信じず、隣人を主要な情報源として、その情報を個々人のおかれた関係にすりあわせることでイスラームを構築して

いる。かれらにとって、ことばとしてある「規範」は、個別性を脱色された社会知として、個々人を律するものとはなっていない。ここにみられるのは、かれらが日常的に「規範」のような社会知を形成していないこと、あるいは、かれらは、社会知にあえて支配されない人びととしてあるということである。かれらは、個々人がその場での選択によって“イスラーム”を構築している。では、イスラームが「規範」としてかれらに遵守を求めるものではないのだとすれば、それを信仰ということばに帰す以外において、かれらにとってイスラームであるとは、どのようなことなのであろうか。

### 2.3 あたりまえの日常生活

かれらにとってイスラームはこれまで指摘されてきたような「規範」としては存在していない。しかし、かれらの暮らしのなかでは、日々イスラームが言及されているのを耳にすることができた。そしてそれは、そうした「規範」的側面をはなれた、他者との関係性という点において、耳にすることができるものとしてあった。

事例 2-10：C 宅：C が自身の夫婦の関係についてかたりながら「私が夫と良く過ごすことはサワップ (Sewab, 宗教的によいこと, 語源：アラビア語)。夫となくらいあいながらすごすことは“イスラームの正しい道ではない (Islamning toghra yoli emes.)”。子供を産んで育てることも良いこと。豚を食べないことは“良いこと (パイディラク / Paydiliq)”。スカーフを結ぶことも良いこと。すべてはより良い生活を送るため。」という (2012 年 6 月 24 日)

事例 2-11：B 宅：朝食の席で B にイスラームについて聞いていた際、B が食べるのに使っていたスプーンをみせながら「すべてはアッラーが与えてくれるもの。このフォーク、スプーンもアッラーがものを食べられるように与えてくれたもの。だからスプーンで飯を食ったらサワップになる。スプーンで人をぶったらグナフ (Guhah, 宗教的に悪いこと, 語源：ペルシア語) になる」という (しかし C 宅滞在中、スプーンを振り上げ、子供をぶとうとする C を見た) (2012 年 6 月 10 日)

サワップ、グナフということばは、サワップが宗教的に推奨される行為、グナフが罪となる行為を意味している<sup>25)</sup> (Ekber 1999: 611, 962)。事例 2-11、2-12 において示されているのは、まず 1 点目に、C と B とが、ものごとの評価をこれらのことばをもちいて対比的におこなっていること、2 点目に、C と B とがこのことばによって説明

しているのは、「宗教的」と考えられる「規範」的な行為ではなく、個々人がそのとき考えていたり、おこなったりしていた、日常の行為を説明するためにもちいられているということである。しかし事例 2-11 を聞いたとき、筆者は一旦これを「規範」だと考えた。しかし事例 2-11 では他の住居（C 宅）において B のことばに反する行動もみられた。そのため、筆者は事例 2-11 で自分はいったい何を聞いたのだろうかということ考えた。

事例 2-12：D の宿舎では、日々夕食を近くの料理店からの配達によってまかなっていた。配達は 17：00 だったため、17：00 に食べる人には、それは良い料理が残っているのだという。D は 22：00 前後に帰ってくるが多かったため、すでに肉がなくなってじゃがいもだけになったような料理をよく食べていたという。あるときめずらしく早くに帰った D が、台所で料理のなかに 3 個の鶏肉があったのをみつけた。D は残りの 13 人が食べられるよう、1 個を少しだけ食べた。そしてしばらくしてふと台所に立ちよったとき、宿舎のメンバーの 2 人が残りの 2 個を 1 個ずつ食べているのを見た。かれらは「気にするな。食べてしまえ」といった。しかし D によれば「“イスラームでは、そういうことはありえない (Islamda undaq ish yoq.)”」のだという。そこへ 3 人目のメンバーが来たとき、3 人目のメンバーは「わあ、いい料理がある。残りの皆のために、残しておかなければ」といったという。D は、「“スカーフを結ばず、礼拝をしない彼女が、そのことは知っていたのだ (Yaghliq ni chigimey namajni oqumaydighan adem shuni bilgen idi.)”」という<sup>26)</sup>。イスラームのなんたるかを彼女はその側面実践していたのだという。D は「他者の取り分を食べてはいけない。取るのに適した量だけをもらうことが必要だ。メッカからメディナに行った人びとも、良くしてくれた人びとが、くれるもの全部をとったのではなく、自分に必要な分だけ取ったのだから。」という（2012 年 7 月 26 日）。

事例 2-13：宿を貸した友人（ウイグル族）が部屋に大量のガラクタを残し新疆に帰る。ガラクタ（なかばゴミ）の山を前に途方にくれながら D が「“彼女はムスリムじゃない (U musulman emes.)”」といった（2012 年 5 月 24 日）

事例 2-12、2-13 は、他者の行動に対する肯定と非難が、イスラームによっておこなわれていることを示しているが、その特徴は、1 点目に、やはりそれがきわめて日常的な、個々人を基点とした関係性に向けられたものであるということ、2 点目にそ



うした関係性の評価が、礼拝、スカーフよりムスリムとしての価値を示すものとされていることである。そこからは、これまでムスリムであるということ的定位するものとみなされてきた礼拝、スカーフという行動規定が、かれらという人びとにとっては2次的なものにすぎなかったという可能性が示唆される<sup>27)</sup>。そうしたあたりまえの日常的な関係性の評価が礼拝や服装に優越するというものいいは、次の事例2-14にもみられた。

事例2-14：C「3人の子供を育てることは、私たちのイバデット（Ibadet. 意味：崇拜、語源：アラビア語）、サワップになる（※両語の並列）。子供を育てたサワップによって、天国に行ける。“天国は母の後ろに”ということばがある。母であることは、それだけで礼拝をすることと同じだけの、コラーンをよむことと同じだけのサワップになる。母を満足させれば、人は天国に行ける。預言者は、誰を満足させればと問われ「1番に母、2番に母、3番に母、4番に父」といった。ムスリムは、父母を満足させると天国に行ける。母によくしてやらないと、甚大なグナフになる。」（2012年6月25日）

事例2-14が示しているのは、かさねてイスラームが日常的行為を評価することばとしてもちいられていることである。そして、事例2-12、2-13と同様に、そうした評価が「ムスリム」として、礼拝、スカーフと同等かそれ以上として語られている点である。これを聞いたのは、Cの生まれたばかりの子供が泣きやまず、Cと筆者とで必死であやし寝かしつけた直後のことだった。放心状態のCは、母が子供を育てた苦労が今わかったといいながら、事例2-14を語ってくれた。そのため、筆者はCがどんなにかCの母を大事に思っていることかと思ひ事例2-14を聞いていたが、事例2-14の直後、Cは「故郷にいる父と母は頭の中がとても単純だ。生活の苦労を話せば泣いてしまうだけだから、かれらにトルコでの暮らしのことなど知らせないことにしている。」とはきすてるようにいった。そのため筆者は事例2-14は何のためにされた話だったのかと困惑した。そしてこれまでの事例2-10、2-11、2-12、2-13をふまえ、また事例2-11にみられたCの逸脱をふまえ、思い当たったのは、かれらは、つねに話者自身のそのときおこなっている考えや行為を正しいということをイスラームをもちいてあらわしていたという点である。ゆえに事例2-14は、おそらく事例2-14の直前までに、C自身が母としての立場で奔走した点を自己評価したことばだったのではないかと考えられた点である。

事例 2-15：E 宿舎にて：トルコ人家庭での食事によばれた夕食の次の日の朝，E2，E3，E4 らが食べられない料理，好きな料理は何かと話していた。E3 はひとしきりトルコ料理に慣れない現状について述べた後，あるウイグル族の人物が用意してくれた朝食の席の話をはじめ「“それはこんなものも，あんなものも，何だってそろった食卓だった。そんな食卓を準備した人間の天国はどんなにか近いだろう (U, bu, hemme nersirer bar. Undaq qilalaydighan ademning jennet qanchiliq yéqin.)”」といった。(2012 年 8 月 12 日)

事例 2-15 が示しているのは，E3 が，自身にとって良い食卓を準備してくれた人間を，天国にいけるとしていることである。そこに指摘できるのは，かれらが日常的なやりとりをイスラームで評価しているということにくわえ，事例 2-13 を含めて，かれらがイスラームをもちいて評価しているのは，自己にとってよいおこないをしてくれた人間に対してであるということ，そのうえで，そうした会話をかれらが，複数人間間での会話において齟齬なくおこないえているということである。この点をふまえると，かれらにとってのイスラームの評価とは，なんらかの共通認識を抽出しうる概念としては存在しえないことがわかる。それは個々人が日常において遭遇する快と不快の表明がイスラームであるということに，逆説的につながっていくからである。こうしたことばに与えられた意味づけは，事例 2-12，2-13 を含め，マイナスの側面があらわされる場においてより鮮明になる。

事例 2-16：A 宅：A が，姉が自分からの電話をとってくれないということを，「“妹にひどいことをしていいなんて話はイスラームにはない (Singilisighe “bozek qil” digen gep islam dinda yoq.)”」と電話で友人に訴えている (2012 年 6 月 2 日)

事例 2-17：B 宅 (B 宅階下の友人宅にて)：B の腕のなかで友人の乳飲み子が泣き，B がなだめながら「“わめくな，お母さんに何のグナフがある？ (Waqirimang, aningizda nime gunah bar.)”」という。(2012 年 6 月 8 日)

事例 2-18：D の社長の妹の結婚式。社長が D に対し「“来てくれないとだめだ (Kelmise bolmas.)”」といい，社長の息子が「“(来ないと) グナフ (Gunah.)”」という (2012 年 7 月 9 日)

事例 2-16, 2-17, 2-18 で注目される点は、事例にみる人びとがイスラームとして否定されるべきこと、あるいはグナフとしてかたっているのは何かという点である。事例 2-16 で A が訴えているのは、A の姉が A からの着信を無視していることである。事例 2-17 は、B が乳児の泣く理由を乳児自身の立場に語りかけたものである。事例 2-18 は、D の仕事場の社長親子らが D にかれらの招待に応じるよう求めたものである。

ここから指摘することができるのは、イスラームによって否定されるべきこと、あるいはグナフとは、話者個人を基点とした不快の関係性にこそあるということである。この意味で、サワップと同様、かれらにとってのイスラームによる否定とは、個々人にとっての不快をめぐってあるという意味で、相対的なものである。ゆえにかれらのことばは、その善悪を評価したことばを含め、その社会的な通用価値はきわめて薄いのである。それはすでに向かい合う個人にとってそうである。

事例 2-19：ある夫婦喧嘩について：(C と C の夫の仕事仲間の妻とが話していた世間話から抜粋)

妻「“宗教で妻を管理しようとせず、アッラーをおそれたらどうなの？ (Din bilen ayalni bashqurmay, teqwalik qilsingiz bolmamdu?)”」

夫「“君は自分の権利を守るため、よく (イスラームを) 勉強したみたいだな。俺もそうやって勉強すれば良かった (Siz üzning hoquq qoghdash üchün yaxshi oqudingiz. Menmu ashundaq oqusam bolatti.)”」(2012 年 6 月 30 日)

事例 2-19 は C と訪問女性とによる世間話において聞くことができた、ある夫婦喧嘩でのいいあいの様子を示したものである。ここに指摘できるのは、妻は夫による宗教を宗教で否定し、その妻と夫のどちらもが、互いの主張によって宗教的に否定されていらないと考えられる点である。つまりイスラームをともなった否定は、おそらく不快を表明している個人がいるということ以上の表現にはなりえていないということである。その結果、かれらの日常的空間にはイスラームが満ち、それはなんらの社会的に共通したイスラームを合意として形成するものにはなっていない。

かれらにとってイスラームとは、何よりもまず自己の肯定をするためのものである。ゆえに、事例 2-20 のような言動も、またできうる。

事例 2-20：仕事場の入っているビルの店主達 (トルコ人男性 3 人) が、建物付属のモスクにエアコンと三菱 (三菱) の冷蔵庫を入れたい、については D の職場の社

長にそれらのための寄付金を出してほしいとやってきた。それに同意した社長をみて(結果 10000 TL [約 46 万円] 払った)、日々賃上げ要求をおこなっていた D は、筆者に対しこの事態を「社長が私に払うべき給料を払わず“アッラーに金をあげてしまうことは正しくない (Allagha pulni berse toghra emes.)”」という。「私にくれるべき金をポケットに入れて、それを寄付にまわすのは正しくない。社長は働きはじめて 1 年たってから給料を上げてやると言っていたけれど、他の社長達は 2～3 ヶ月の勤務でも給料を上げている。コラーンでは、労働の対価は、労働の汗が乾くより前に支払え、とっている。どのくらい働いたら、そのくらい払えとっている」という(2012 年 6 月 14 日)(当時 600 TL だった D の給料は、さまざまな働きかけのうえで 1000 TL にあがった。)

事例 2-20 に示されているのは、D が、モスクへの寄付と自身の賃上げという 2 つの要素のままで、なお自身の賃上げを選択し、その選択が彼女にとって正しかったという点である。この点は、喧嘩をする双方がイスラームの正しさを口にした事例 2-19 にも通じ、D にとっては、モスクに寄付をする、すなわち“アッラーに金をあげる”行為は、「イスラームとして」正しくない行為だといえたということである。事例 2-20 から示されるのは、たとえかれらにとっていくつかの「イスラーム」が重なりあったとしても、かれらに選ばれる「正しいイスラーム」とは、「社会」に貢献するといったものではなく、「規範」としての正しさでもなく、何よりも自身を益するイスラームである可能性があるということである<sup>28)</sup>。イスラームとは、かれら個人を肯定することばであり、そうした肯定によってかたちづけられているのが、かれらの社会的な人間関係の一部としてあるということを推測していくことができる。イスラームはかれら個人を肯定することばである。それがゆえに、かれらのイスラームは往々にして状況を定義する力を持たない。

#### 事例 2-21：断食期間中に不払いになる食事代について

断食期間中社長達は、いつもは払う昼食代をくれなくなるという。D の職場の社長もまた払わないと言っているのだという。断食なら、日々断食があけたときに、むしろ食事はとるだろうと聞くと、疲れて早く家に帰るようになるから会社ではとらなくなるからだという。仕事からの帰り道、D は社長に“ペリズ (Perj, 意味：ムスリムの義務)にかかわることなのだから (Perj baghliq ish tursa)”。ペリズのことで、使用人たちの胃袋を満たしてやれるのなら、“大きいサワップ (Chong sewab)”に決まって

いるのではない。“イマーム達に聞いてみなさい (Imamlal din sorappqing.)”, “ラマザン期間中の食事代を払わないなんてことは間違ったことだから (Ramzan da tamaqning pul bermeymen, u ish xata)” という (7月19日)。翌日に聞きなおすと、断食期間にはまったくそれらが払われなくなるわけではなく、その期間の終わり頃に100 TLを祭りの祝い金としてくれるのだという。しかし通常は一日に食事代7 TLをくれていたため、 $42 \times 4^{29}$ , 約180 TLになっていたわけなので、祝い金をもらったとしても通常に比較すればラマザンでは80 TLは社長のポケットに残ることになる。「私は給料が1000 TL, 宿舍代は今度また200 TL。これでは金が足りなくなる」と電卓を叩きながらいう。「私がひもじい思いをしなければならなくなる。だからいったのだ (Men qiyinchiliqqe qaldighan ish. Shunga didim)” という。他のここで働いている男性などはみっともないからといわないだろうという。しかし1000 TLはかれらの生活にだって足りていない。でもみっともないから、などといって、いわなかったら駄目なことなのだ、という。そして「他の人にも聞いてごらん (Bashqilar din sorang.)”, “イスラームで間違った行為だ (Islam da xata.)” というつもりだった」とうたえる<sup>30)</sup> (2012年7月20日)。

事例2-21が示すのは、Dにとって、自身の窮状の改善こそがイスラームの正しさであるということであり、D自身もそれを正面から認めた発言をしていることである。そしてそれは「イマーム」という宗教的な他者を引き合いに出してさえ、なお彼女が「正しい」ことといいえたということが出来る。その姿勢にみられるのは、彼女にとってイスラーム的に正しいという人間関係とは、周囲が彼女に貢献してこそ正しいというものとして彼女自身に認められえているということである。

この後、7日たって筆者がDに食事代の件はどうなったかと聞いたところ、Dは、他の人もいうようならもらいたかったが、いわなかったようなのでいい、社長やもうひとりの男性従業員は、ラマザンを全ての日において実行するだろうから、といっていた。そのことばが示すのは、Dにとってのイスラームが、イマームという存在を巻き込んでなお、状況を定義する力をもっていなかったこと、Dがそれを受け入れていることである。そして興味深い点は彼女が、自身のイスラームの否定を、断食の実行というさらに別のイスラームによって納得しようとしている点である。かれらは、イスラームに対してもイスラームをその場を認めるための要素としてつかう。

かれらは他者とのつきあいにおいて、自己肯定をぶつけあう。そして、そうした自己肯定にことばを与えているのが、イスラームといことばの集まりであるというよう

に考えることができる。かれらがこうした自己肯定をぶつけあう人間関係とは、どのように構成されているのだろうか。そしてそれは、トルコに住むムスリムの人びとのあいだでどのような関係を構築するものとなっているのか。

### 3 つきあいをいろどるイスラーム

#### 3.1 家・男女・訪問者

これまで人びとが、目の前の人間関係とのあいだで、イスラームをめぐる個人的な肯定の表明をぶつけあっていることを確認してきた。かれらのこうしたコミュニケーションは、実際にどのような関係のひろがりのあいだで構築されているものなのだろうか。この点を、まずA, B, Cという家庭をもつ人びとの住居での8日～26日間のつきあいのデータ記録のなかから確認していく。

A, B, C3宅においてみられた訪問者を記録したものが、付表1-1, 1-2, 2, 3である。この付表1-1, 1-2, 2, 3が示すように、各家庭では、日々訪問者がみられた。その平均訪問者数は、A宅2010年調査時（ファティーフ地区調査時、以下A宅①）で日に5.2人（付表1-1計算）、2012年調査時（スルタンベイリー地区調査時、以下A宅②）で2.7人（付表1-2計算）、B宅では平均10.25人（付表2計算）、C宅では平均2人（付表3計算）という数になった。この数からみて、家庭を持つ人びとのあいだでは、住居とは、つねに家族以外の誰かを迎える空間としてあったということができる。この訪問者とはどのような人びとか。これは、以下の3点にまとめることができた。

まず1点目には、そこでは女性、男性のつきあいがわけられ、それによって住居が女性のつきあい空間として機能していたという点である。

事例3-1：「“女性だったら戸を開けて、男性だったら開けないで（Ayal bolsa ishkini éching. Er kishi bolsa achmang.）”。」

事例3-1は、滞在はじめのB宅、C宅において、筆者がBとCから聞くことのできたことばである。このことばはBとCとのあいだで一言一句変わることなく同じことばとして聞くことができた。このことばからみいだすことができるのは、かれらのつきあいは、知り合いか知り合いでないかではなく、まず男女でわけられることで

付表 1-1 A 宅① 3月1日～3月19日の19日間における訪問客・宿泊客

		女性	男性	子供	宿泊女性	宿泊男性	宿泊子供
3月1日	友人女性①	●					
	友人女性①の娘	●					
	夫の友人男性②		▲				
3月2日	夫の友人男性①		▲				
	夫の友人男性②		▲				
3月3日	夫の友人男性①		▲				
	A 兄の嫁になるはずだった女性（離婚）	●					
	長女の同級生①（すぐ帰宅）			■			
	長女の同級生②（すぐ帰宅）			■			
3月4日	夫の知り合いの宗教者の妻（金を届けに） ←すぐ帰る	●					
	夫の知り合いの宗教者の妻（姉を案内して） ←すぐ帰る	●					
	A 姉				●		
	A 姉の家政婦				●		
	A 姉の子供①②③						■■■
3月5日	A 兄		▲				
	A 姉の家政婦				●		
	A 姉の子供①②③						■■■
	新疆からきた退職医者女性				●		
3月6日	A 姉の家政婦				●		
	A 姉の子供①②③						■■■
	新疆からきた退職医者女性				●		
	同じ建物に住む女性（トルコ人）	●					
	A 兄		▲				
	A 兄の妻（トルコ人）	●					
	A 兄夫妻の子①②③④			■■■■			
3月7日	クルグズスタンのウズベク族女性①				●		
	クルグズスタンのウズベク族女性②				●		
	A 姉の家政婦				●		
	A 姉の子供①②③						■■■
3月8日	夫の友人男性①（クルグズスタン女性①②の送迎）		▲				
	クルグズスタンのウズベク族女性①				●		
	クルグズスタンのウズベク族女性②				●		
	A 兄		▲				
	新疆からきた退職医者女性				●		
3月9日	A 兄		▲				
	夫の友人男性②		▲				
	大家の娘（トルコ人）	●					
	修理屋夫①②		▲▲				
	夫の友人男性①（クルグズスタン女性①②の送迎）		▲				
	クルグズスタンのウズベク族女性①				●		
	クルグズスタンのウズベク族女性②				●		
	新疆からきた退職医者女性				●		
3月10日	夫の友人男性①		▲				
	クルグズスタンのウズベク族女性①				●		
	クルグズスタンのウズベク族女性②				●		
	新疆からきた退職医者女性				●		

熊谷 ムスリムの国へ行ったムスリム

3月11日	A 姉	●				
	A 姉の夫←すぐ帰る		▲			
	クルグズスタンのウズベク族女性①				●	
	クルグズスタンのウズベク族女性②				●	
	新疆からきた退職医者女性				●	
3月12日	修理夫男性（トルコ人）←すぐ帰る		▲			
	修理夫女性（トルコ人）←すぐ帰る	●				
	夫の友人男性①←すぐ帰る		▲			
	夫の友人男性②←すぐ帰る		▲			
	クルグズスタンのウズベク族女性①				●	
	クルグズスタンのウズベク族女性②				●	
	新疆からきた退職医者女性				●	
3月13日	同じ建物に住む女性（トルコ人）	●				
	クルグズスタンのウズベク族女性①				●	
	クルグズスタンのウズベク族女性②				●	
	新疆からきた退職医者女性				●	
3月14日	A 従姉妹				●	
	夫の友人男性①（クルグズスタン女性①②の送迎）		▲			
	クルグズスタンのウズベク族女性①				●	
	クルグズスタンのウズベク族女性②				●	
	新疆からきた退職医者女性				●	
3月15日	クルグズスタンのウズベク族女性①				●	
	クルグズスタンのウズベク族女性②（出稼ぎ開始）	●				
	新疆からきた退職医者女性				●	
	ウズベク族女性②の雇い主夫（トルコ人）		▲			
	ウズベク族女性②の雇い主妻（トルコ人）	●				
	A 従姉妹	●				
3月16日	夫の友人男性①（クルグズスタン女性①の送迎）		▲			
	A 姉の家政婦	●				
	A 従姉妹	●				
	クルグズスタンのウズベク族女性①				●	
	新疆からきた退職医者女性				●	
3月17日	A 従姉妹	●				
	夫の友人男性①（クルグズスタン女性①の送迎）		▲			
	クルグズスタンのウズベク族女性①（帰国）	●				
	新疆からきた退職医者女性				●	
3月18日	A 姉	●				
	A 従姉妹	●				
	新疆からきた退職医者女性（友人女性の家へ）	●				
	A 兄		▲			
3月19日	A 兄		▲			

凡例	
女性	●
男性	▲
子供	■



付表 1-2 A 宅② 5月27日～6月4日の9日間における訪問客・宿泊客

		女性	男性	子供	宿泊 女性	宿泊 男性	宿泊 子供
5月27日	向かい宅の女性（トルコ人）と立ち話	●					
	アラビア語の教師（シリア人）	●					
	A 夫と男性（男性は屋内が見える位置には立たない）		▲				
	新疆からきた退職医者女性（空港より A 夫送迎）				●		
5月28日	新疆からきた退職医者女性				●		
5月29日	A 夫と男性2人（顔見れず）「客間で人はいないか」		▲▲				
	A 従姉妹				●		
5月30日	（友人女性①の家に行く。A 従姉妹そこで宿泊）	●					
	アラビア語の教師女性（シリア人）	●					
	新疆からきた退職医者女性				●		
5月31日	A 従姉妹				●		
	新疆からきた退職医者女性				●		
6月1日	新疆からきた退職医者女性				●		
	A 従姉妹				●		
	友人女性①	●					
6月2日	友人女性①の夫（トルコ人）		▲				
	ミルク売り男性（トルコ人）		▲				
	新疆からきた退職医者女性				●		
	A 従姉妹				●		
	A 夫の店舗の従業員男性 （A 兄の嫁になるはずだった女性（離婚）電話）		▲				
階上の女性（トルコ人）ハルワお裾分け	●						
6月3日	アラビア語の教師女性（シリア人）	●					
	A 従姉妹				●		
	新疆からきた退職医者女性（帰国）	●					
6月4日	A 従姉妹				●		

凡例	
女性	●
男性	▲
子供	■

付表2 B宅6月6日～3月19日の8日間における訪問客・宿泊客

月日	訪問者内容	女性	男性	子供
6月6日				
6月7日	ウイグル族女性「子供をトイレに行かせたい」 (ジェルバップなので人相不明)	●		■
	下階のウイグル族女性の娘			■
	水売り (トルコ人)		▲	
	上階のウイグル族女性, コイマックの差し入れ	●		
6月8日	(イスラームの勉強会)	(○)		
	下階のウイグル族女性	●		
	(職場のピクニック (30 数名の女性と子供, 男性 2 人))	(○)	(△)	
	下階のウイグル族女性とその子	●		■
	(コンピューターの授業。下階の女性も一緒に) (下階の女性宅で食事 (B と 3 人の娘, 筆者))			
6月9日	自宅でイスラームの勉強会			
	ウイグル族女性 7 人, 子供 8 人	●×7		■×8
6月10日	下階のウイグル族女性宅からふくらし粉貰う			
	下階のウイグル族女性宅からたまねぎを貰う			
	上階のウイグル族女性, トマトとナンを届けてくれる	●		
	職場のメッセンジャー少年		▲	
	ウイグル族の学生 (娘と一緒に来訪し帰宅)			■
	<b>Bdu (ウズベク族女性   夫はウイグル  )</b>	●		
	上階のウイグル族女性 (果物をもらいに)	●		
下階のウイグル族女性	●			
6月15日	下階のウイグル族女性	●●		
	食品会社の授業へ			
	(女性 9 人, 子供 1 人で授業へ)	(○)	(△)	
	(その後 B1 人コンピューターの試験) (キルギス出身のウズベク族宅へ。夫はウイグル)	(○)	(△)	
6月16日	<b>八百屋, 人参 200 kg 配達</b>		▲	
	※配達男性は神隠しにあったかのようにいない			
6月17日	17 宅に人参を持って行ってもらう	●×21		
	(コラーンを読む発表会)	(○)	(△)	

凡例	
女性	●
男性	▲
子供	■
不特定多数女性	○
不特定多数男性	△
住居外で出会った関係 ( )	( )

付表3 C宅6月22日～6月30日の9日間における訪問客・宿泊客

		女性	子供	男性
6月22日	(Dから電話)	(◎)		
6月23日	Bduの長男(料理委託のお使い)		■	
	友人の大学生(女性, 背負い帯の差し入れ)	●		
	夫婦帰宅後に男性 (下階のBdu宅へ)			▲
6月24日	(筆者, Bの娘と委託した料理を受け取りに)			
	Bduの長男(薬を渡しに)		■	
6月25日	Bduと長女	●	■	
	(Bから電話)	(◎)		
	(夫の仕事仲間の妻①から電話)	(◎)		
6月26日	(下階のBdu宅へ)			
6月27日	管理人(トルコ人)バケツに水をもらいに	●		
	Bduと次女	●	■	
6月28日	Bduと長女と次女	●	■ ■	
6月29日	夫の仕事仲間の妻①と娘2人	●	■ ■	
	(サウディのウイグル族から電話)	(◎)		
6月30日	Bduと長女と次女	●	■ ■	

凡例	
女性	●
男性	▲
子供	■
電話	(◎)

なりたっているという可能性である。

図5, 6, 7, 8は, A宅, B宅, C宅でみられた訪問者を, 女性, 男性, 子供(未婚者)と区別によって示し, そのうえで男性の訪問者について示したものである。ここにみいだすことができるのは, 男性の訪問者は多い場合でも20数%を越えることはなく, 男性の宿泊者はいないということ, そして訪問者の多くは女性であるということである。そうした女性の割合はA宅①では58%(訪問+宿泊), A宅②では76%(訪問+宿泊), B宅では72%, C宅では39%という数値になる。C宅では女性より子供の割合が高いが, これは, C宅が階下の女性とのあいだで新生児の薬の受け渡し等をおこない, 子供がそのお使いをおこなっていたためである。こうした場合を除くと子供は単独の訪問者であることはあまりなく, そのほとんどが母親の同伴であることを考えると, A宅①では77%, A宅②では76%, B宅は94%, そしてC宅では94%が女性と子供であるということができる。これによって, 家庭における訪問者は, 7割以上は女性と子供であるということができる。

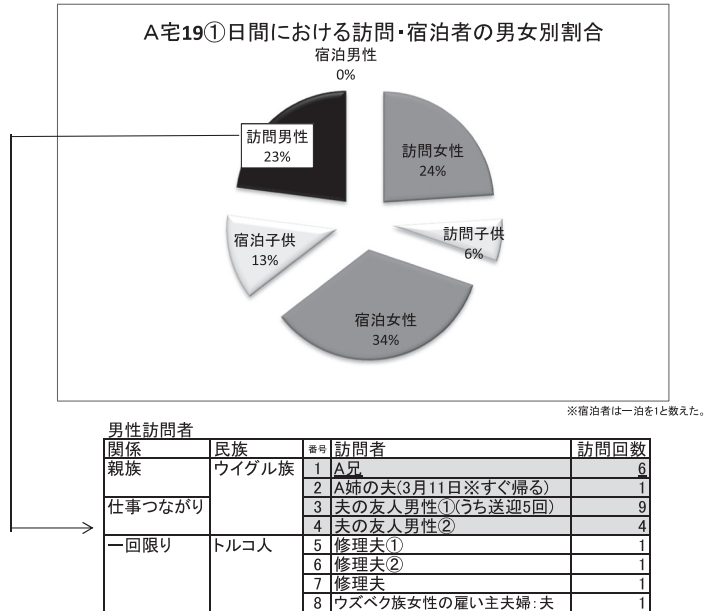


図5 A宅①19日間の訪問・宿泊者にみる男女別割合と男性訪問者

事例3-2:「夫がない家には男性は来ない (Yoldashim yoq bolghandin kéyin er kishi kelmeydu。)」(2012年3月3日)

事例3-2は、A宅において、工事の人間が家に来るといわれていたときに、筆者が、修理夫(=男性?)が家に来るのなら、スカーフを巻いて準備しようかといったときにAが答えたことばである。このAのことばからは、女性のいる家へ誰かが来るといふことは、それがかれらのあいだでは女性であるという前提をもっていたことを示している。

図5, 6, 7, 8から示されるのは、Aのことばにみられるように、男性訪問者の訪問には、一定の特徴をみいだすことができる点である。それは物売りといった人びとを除けば、男性の訪問者が、その訪問を、配偶者のいる女性同伴の夫の立場での訪問か、家庭に夫という男性がいる時のみの訪問か、運転手等に徹する等、固定された役割を実行するにとどめている点である。図5のA宅①は、その調査が引っ越し直後であったこともあり、3人のトルコ人の修理夫が家内の機器整備のためにおとずれていた(図5番号5, 6, 7)。また、夫の友人男性たちが、家財搬入の手伝いを夫とともにこなっていた(図5:番号3, 4, 各4回ずつ)。そうした人びとを除くと、み

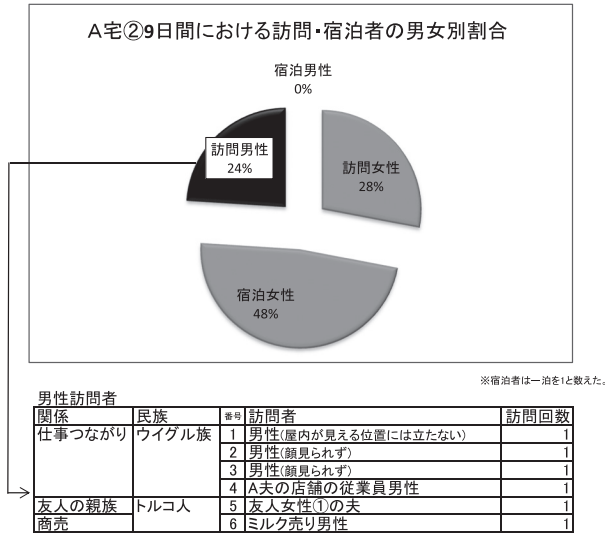


図6 A宅②9日間の訪問・宿泊者にみる男女別割合と男性訪問者

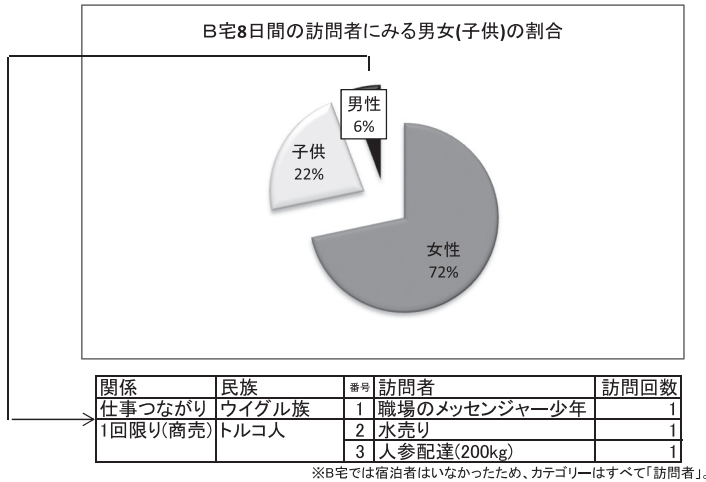


図7 B宅8日間の訪問者にみる男女別割合と男性訪問者

られた男性訪問者は、Aの姉の夫(図5番号2 ※妻とともにきて妻を残しすぐ帰る)、客人女性の送迎を車でおこなった夫の友人男性(図5番号3, 5回)、そして客人女性の出稼ぎの雇い主としてまねかれたトルコ人夫婦のうちの夫である。このうち、Aの血縁の兄のみは、A宅にて長くとどまり、Aとの会話をゆっくりとおこなっていた(図5:番号1)。このように、男性訪問者は、一部を除けば、限られた役割をはたす

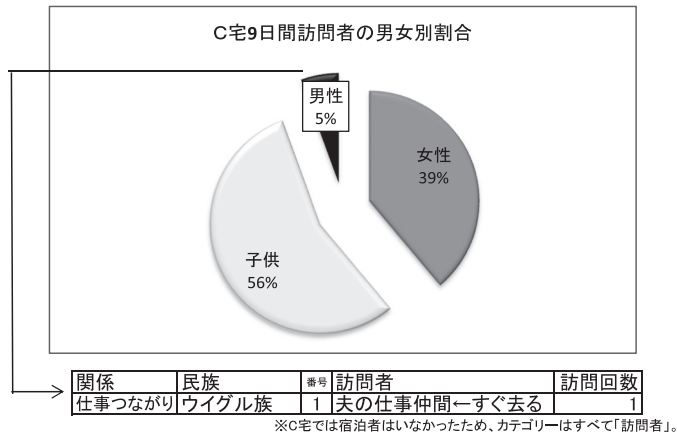


図8 C宅9日間の訪問者みる男女別割合と男性訪問者

ものとしてみいだすことができる。

図6のA宅②の調査時は、A宅①に比べると、引っ越しも済んだ状態であり、ここでは修理夫といった人びとの訪問はみられなかった。ここでみられたのは、Aの夫に昼食への同道をうながされたAの夫の仕事仲間の人びとである(図6:番号1, 2, 3, 4)。かれらによる訪問はその多くがAの夫によって慎重に隔離され、筆者からは、かれらの顔を確認することもできなかった。この他、物売りが1人(図6:番号6)、そして夫婦による訪問として、ウイグル族の妻の訪問にトルコ人の夫がついてきたことをみいだすことができる(図6:番号5)。後者には、かれらのあいだの通婚関係の存在を確認することができる。この男性による訪問は、トルコの習慣である妻の一人歩きはさせないということによるとAや他の女性たちが指摘していたものであるが、かれを迎えた女性たちは、かれから、あえて隠れるということにはなかったものの、かれの訪問時間にA宅でかれの相手をする人間はいなかったため、部屋では放っておかれているということがみられた。

図7でのB宅での調査は、夫不在であったため、こうした夫をめぐる男性の訪問者はみられない。B宅でみられた男性訪問者は、Bの職場の少年が用聞きに来た以外では(図7:番号1)、水売りや八百屋という物売りがみられたのみである(図7:番号2, 3)。このうち水売りは筆者が応対し(B不在)、八百屋は、Bの職場での集まりのための200kgの人参の配達の際、八百屋のノックでこちらが扉をあけたとき、そこには人参だけが置いてあり、八百屋はそこからはいなくなっているという訪問形態であった。

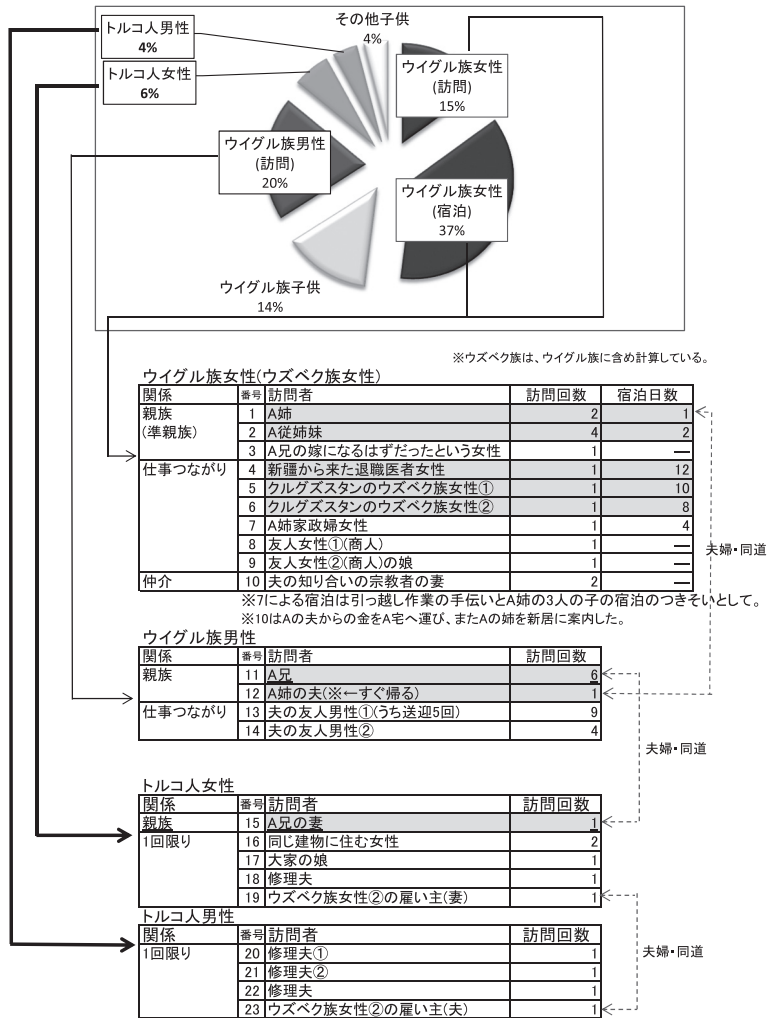


図9 A宅①19日間における訪問・宿泊者

図8のC宅では男性訪問者は1名がみられたが、この男性は、Cの夫が帰宅した直後にやってきて、Cの夫とともに商品を運び出していったのみである(図8:番号1)。このように、男性がいれば男性の訪問者がみられるということは(A宅①②、C宅)、住居が固定した女性か男性かの空間ではなく、そこに誰がいるかで変わる空間としてあることを示している。しかし、男性は多く男性同士の関係に隔離され、また男性自身も女性のいる場所を避けるようふるまっていることを考えると、そこは男性にとってはやはり一時的な空間であるということができると思われる。このように、

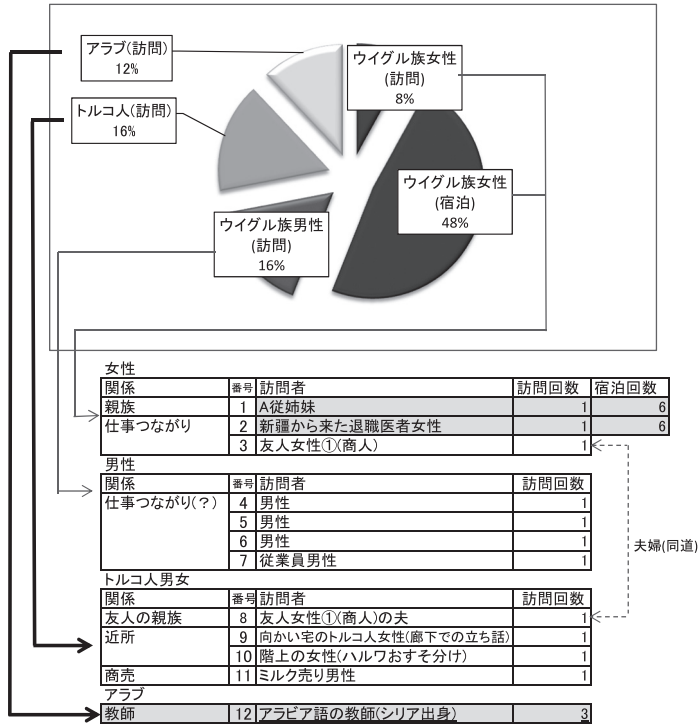


図 10 A 宅②9 日間における訪問・宿泊者

住居では女性同士、男性同士のつきあいが柔軟性とともに行われ、それによって住居内はおもに女性のつきあいの場となっているといえる。

2 点目の特徴は、訪問者の民族に、共通して若干のウズベク族<sup>31)</sup> がみられることを除くと、そこにはウイグル族にかぎられた、民族的にはほぼ単一のつきあいが構成されている点である。図 9～12 は各家庭に占めるウイグル族（ウズベク族）以外の民族の割合とそれぞれの訪問者の内容について示したものである。図 9 の A 宅（①）でみられた約 10% のウイグル族（ウズベク族）以外の人物は、引っ越ししたての A 宅で呼ばれた修理夫と（図 9：番号 18, 20, 21, 22）、出稼ぎをしに来た客人女性の雇い主として紹介されてきたトルコ人の夫妻（図 9：番号 19, 23）、そして引っ越しの様子をみにきた大家の親族、近所の人びと（図 9：番号 16, 17）といった人びとである。そこにみいだすことができるのは、かれらが A 宅にとって一時的な関係にある人物にすぎないという点である。例外は、A の兄の妻であるトルコ人女性であるが（図 9：番号 15）、前述したように A の兄自身は同じ期間に単独で A 宅を 5 回訪れている。そのため、A の兄の同道による A の兄の妻によるこの 1 度の訪問（付表 1-2：



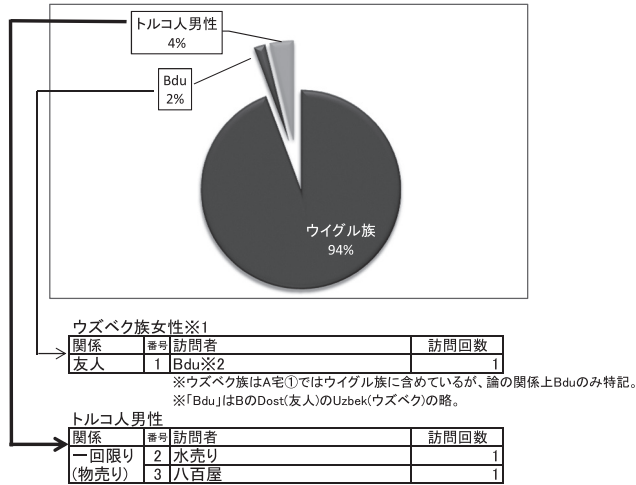


図 11 B 宅 8 日間におけるウイグル族以外の訪問者

3月6日)は、Aの兄の妻があまりA宅には来る存在ではなかったことを示しているように思われる。同じように図10のA宅②でみられたのは、そうした近所の人物や物売り(図10:番号9, 10, 11)を除けば、友人女性の夫のトルコ人男性であるが(図10:番号8)、この人物が、つきあいとして意味がない訪問をしていたのは前述のとおりである。

B宅でみられたウイグル族以外の人物は、前述の水売りの男性(図11:番号2)と八百屋(図11:番号3)である。C宅では、建物の管理人であるトルコ人女性がパケツに水をもらいにノックしてきたのみである(図12:番号8)。ここにみることができるのは、A宅、B宅、C宅において、トルコ人という人びとは、継続的なつきあいをする対象としては存在していなかったという点である。かれらは、隣人であるトルコ人をまったくそのつきあいに組み入れてはいない。

こうした家庭の訪問客にみられる特徴の3点目は、そうして迎え入れられた女性でありウイグル族(ウズベク族)であるという人びとが、多くかれらと仕事をこなす関係者であり、こうした客の多くが、家庭の夫の仕事とも直結した人物であることである。仕事をしているB宅ではB自身の仕事に関する訪問者が多いことに加え、C宅では夫の仕事仲間の妻と子(図12:番号2, 3, 4)が訪れている。こうした点は、A宅ではさらに顕著で、夫が販売する商品を海外から運んできたクルグズスタンの女性2人(図9:番号5, 6:10泊, 8泊滞在)と、同じく商品を運んできたと同時に、将来的にAに医術のトレーニングをほどこし、Aの夫の仕事をAが分担していくこと

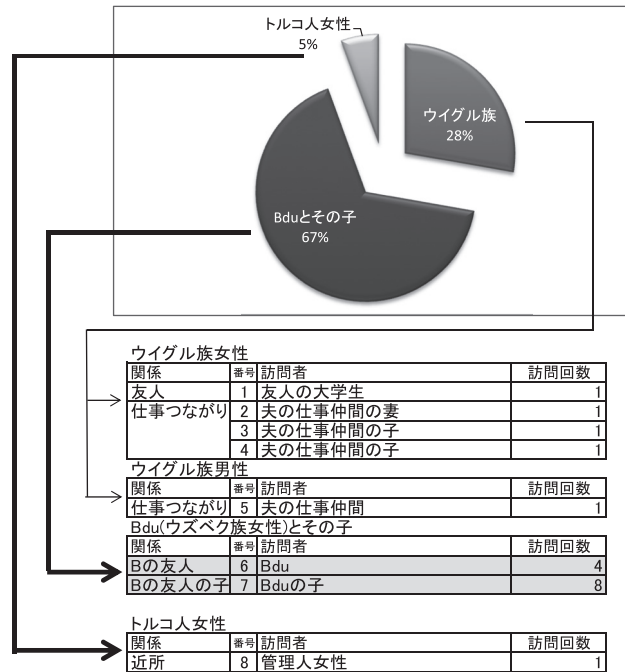


図 12 C 宅 9 日間における訪問者

を視野に入れた女性が長い期間 A 宅をおとずれていた (図 9: 番号 4, 12 泊)。後者の人物による訪問は A 宅②の調査においてもみることができる (図 10: 番号 2)。このように A という人物は、夫の仕事をめぐって輸送や仕事をおこなう人びとをもてなし、夫の仕事を A の立場でともにこなす人物とすることができる。この点は、A の夫を含む、夫である男性達が、外部での企業といった社会的集団に属さず働いていることとも関連してくる問題であると思われるが、家庭における女性のつきあいは、金銭をかせぐ夫達の「公的」空間におけるつきあいと直結している。そして、そうした親族と仕事関係の人物というカテゴリーをのぞくと、あまり客としての多様性がみられないのも、訪問者の特徴である。

このうちウズベク族という人びとの存在について若干述べると、B 宅、C 宅でみられた Bdu としたウズベク族の人物は、共通した 1 人の人物を指している (図 11: 番号 1, 図 12: 番号 6 (+ 7))。ウイグル族 (新疆カシュガル出身) を夫とするというウズベク族のこの女性は、B がパキスタンに滞在していたときからの友人である。彼女は、C がザイトウンブルンに引っ越してきた際、C が新居とした同じビルに住んでおり、C が B に連絡をとった際、彼女にも助力をこえと B が C に紹介してくれたの

だという<sup>32)</sup>。このつきあいからは、かれらが自身の経歴において出会った人びととのつきあいを長くはぐくんでいるということを読み取ることができる。しかしそうしてしてみると、Bはパキスタンにて、Cはサウディアラビアにて長くをすごしてきたという経歴をもつ。そしてかれら全員が、大学卒業までをすごしてきた中国がある。しかし、かれらはそうした国の人びととのつきあいをまったくはぐくんでいないのである<sup>33)</sup>。このことは、かれらが隣人としてでもムスリムとしてでもなく、ウイグル族とウズベク族という、民族的に近い人びとのみをつきあう対象としえてきたというように考えることができる。そして、このような訪問者が、A宅では新疆やクルグズスタンといった海外からの人物であったことを考えると、トルコ人を含む他の民族を隔てる壁は、かれらにとって、物理的距離よりも越えがたいものとしてあったというように考えることができる。

こうしたウイグル族家庭のつきあいの記録に、アラビア語の教師だというアラブ女性がいた(図10:番号12)。この人物は、A宅の近くのイスラーム学校の教師で、コラーンのアラビア語、フスハー(正則アラビア語)をAに教えるために訪れていたが、シリア国籍だというこの女性は、トルコ語が話せなかった。そのためAとこの女性は、覚えてたのアラビア語での会話をおこなっていた。ここにみることができるのは、トルコ社会にとって異民族であるかれらが、このアラブ女性の存在を含め、トルコ人社会から乖離し、コラーンのアラビア語、つまりイスラームと直結していたことを示していたように思われる点である。

こうしたつきあいをおこなう家庭でみられた食事内容を示したものが表1である。表1が示しているのはA、B、C宅で食された料理内容のほとんどが手づくりのウイグル料理であり、外部からの購入によるトルコの料理の流入等が、ほとんどみられないことである。A、B、C宅においてトルコ料理がみられたのは2回だった。1度はウイグル族同士のコラーンの勉強会にBがつくった、Bがボレック(BÖREK)と呼んだものであり(表1:B宅6月9日)、もう1度がA宅でトルコ人を迎えた際にAが準備したチョルバ(ÇORBA)である(表1:A宅①3月17日)。

Bのボレックは、BがユフカYUFKAとよんでいた小麦粉の皮<sup>34)</sup>で、いためたレタスと卵を巻き、オープンで焼いたものであった。この調理法をBはトルコ人にならったのではなく、トルコ人とのコラーンの勉強会等を見て、つくりかたを適当に真似たのだといていた。ただこうした小麦粉の皮で巻いてつくる料理は新疆にもあるため<sup>35)</sup>、トルコ料理の流入とはあまりいいがたい点も指摘できる。

チョルバは、家政婦としての出稼ぎをしたいとA宅を訪れていたウズベク族女性

表1 A・B・C宅においてみられた食事の内容

## A宅① 19日間の食事内容

3月1日	ピッティルマンタ(テイクアウト)
3月2日	マンタ・サモサ (テイクアウト)
3月3日	米飯・サイ
3月4日	ラグメン (昼), ジュワワ (夜)
3月5日	ジュワワ
3月6日	ラグメン (昼) ジュワワ (夜)
3月7日	ポロ
3月8日	ポロ (昼) ウギユレ (夜)
3月9日	ガンパン
3月10日	ガンパン
3月11日	ボラックマンタ
3月12日	ポロ
3月13日	ジュワワ
3月14日	ラグメン
3月15日	ガンパン
3月16日	ダーパンジー
3月17日	ラグメン(※ <u>チョルバ</u> , 客へのみ)
3月18日	ポロ
3月19日	ラグメン

※A①注：1日と2日のテイクアウトは引越直後による台所環境不備のため。

## A宅② 8日間の食事内容

5月27日	インスタント・ラーメン
5月28日	ガンパン
5月29日	ポロ
5月30日	ポロ (友人宅への招待)
5月31日	ダーパンジー チュチュレ ギョシュショルバ
6月1日	ラグメン
6月2日	ガンパン
6月3日	ラグメン

## B宅7日間 (+半日2回) の食事内容

6月6日	鶏肉・ナン (※半日調査)
6月7日	ラグメン
6月8日	サイ (ラグメンの残り) とナン ラグメン, マンタ (階下ウイグル 族宅差し入れ)
6月9日	<u>ボレック</u> ガンパン
6月10日	(ナン茶のみ)
14日夜	マンタ
6月15日	コイマック サバのオープン焼き
6月16日	ポレ ヤップマ
6月17日	(ナン茶のみ) (※半日調査)

## C宅8日間 (+半日) の食事内容

6月22日	スユカシ (※半日調査)
6月23日	ショウグルチ スユカシ
6月24日	スユカシ, ショルバ チュチュレ
6月25日	ショルバ インスタント・ラーメン
6月26日	メンチーゼ 鶏肉のオープン焼き
6月27日	ラグメン チュチュレ
6月28日	羊の頭と蹄の煮もの インスタントラーメン
6月29日 (断水)	スユカシ ラグメン (テイクアウト)
6月30日 (断水)	チュチュレ ショルバ

※全体注1：料理が特にとられていない時間にはナンと茶がとられていた。

※全体注2：インスタント・ラーメンはすべてインドネシア製だった。

※全体注3：本稿では料理内容の詳細は割愛する。料理については熊谷 (2011) あるいはAbdukérim (1996) 参照。

に、Aの夫が雇い主として探してきたトルコ人夫妻を引き合わせ夜のためにつくられたものだった。それは日々手づくりの料理を準備していたA宅①の調査時において、初めてみられたインスタント食品<sup>36)</sup>の料理だった。Aはこれを「“トルコ人というのはチョルバを飲むものだ (Turkler digen chorba ichidu.)”」といいながらつくり、客の前へと持っていった。しかしほとんど飲まれずかえてきた。このチョルバとそれをめぐるAとトルコ人夫妻のやりとりからは、A宅ではトルコ人とのあいだでの食事をもにしたつきあいがほとんどなされていなかったことを推測することができる。イスタンプルのウイグル族家庭では日々ウイグル料理がつくられ、そこにはトルコ料理の流入や、その他の工業製品への依存がほとんどみられない食事の場がつくられていたといえる。それは、2章でみた、他者の触れた食べ物への抵抗を反映してなりたつた食事の場であったというように考えることができる。

このようにイスタンプルのウイグル族家庭では、ウイグル族同士で、手づくりのウイグル料理をかこむ、ウイグル族同士での仕事をする関係の人びとによるつきあいの空間が形成されていた。このことは、かれらのなかにはトルコ国籍をとり、トルコの滞在が8年(A)、10年(B)におよぶ人物がいることを考えると、かれらにとって、ムスリムとしてトルコに暮らすということが、トルコの料理を食べず、トルコ人とのつきあいをおこなわない、ウイグルであり続ける暮らしをすることであったということとして考えることができる。

### 3.2 さけあう人びと

これまで家庭を持つ人びとの住居という場におけるつきあいと食事のありかたを確認してきた。そこにみられた特徴は、自民族とのつきあいにかたよったものであったと考えることができる。こうした点は単身者のDや、宿舎Eの学生にとってはそれぞれどのようになっているのか。この点を、まずDからみていく。

Dは第1章3節において述べたように13人のトルコ人女性たちと、ひとつのアパートの部屋で共同で暮らしている。ウイグル族同士で住む学生がいたのを知っていた筆者は、どうしてウイグル族同士で住んでいるところにいかなかったのかと聞くと、Dは「面倒だから (Awarichliq)」と答えた。

Dが仕事をするのは、ウイグル族の人物の会社で、ここの社長男性はDの友人の友人の弟ということであった。仕事をするDは、毎日トルコ人を含めた多くの人びとと顔をあわせる。朝アパートを出ると、Dは仕事場まで徒歩でかよう。30分ほどの道のりの後、Dが仕事場でまず会うのが、常駐する社長と2人の息子、ウイグル族

表2 Dの7月3日～7月28日の26日間において出会った関係

日にち	勤務状況	出会った人物 (or 機関)	Ωレストラン 利用	女性	男性	目的・その他
7月3日	休み	教師男性 (カイセリ在住)	□		▲	筆者を紹介するため
7月4日	出勤	教育事務女性 教育事務女性の母		●		筆者を紹介するため
7月5日	出勤	ワクス		○		筆者を紹介するため
7月6日	出勤					
7月7日	出勤					
7月8日	出勤	E1		●		友人の事務手続き手伝いのため
7月9日	出勤					
7月10日	休み	商人女性 (自宅での手づくりボロ) 商人女性の夫 社長の妹の結婚式		●	▲	
7月11日	出勤	マレーシアを経由してきた姉弟 ウイグル族男子学生		●	▲	姉弟の宿舎手配手伝い
7月12日	出勤	マレーシアを経由してきた姉弟	□	●	▲	
7月13日	出勤		□ (筆者と)			
7月14日	出勤		□ (筆者と)			
7月15日	出勤					
7月16日	出勤	マレーシアを経由してきた姉弟+ウズ ベク族男性	□	●	▲▲	
7月17日	休み	マレーシアを経由してきた姉弟	□	●	▲	
7月18日	出勤	ワクス		○		筆者を紹介するため
7月19日	出勤		□			
7月20日	出勤					
7月21日	出勤	社長、社長の息子と進学祝い	□		▲▲	
7月22日	出勤	マレーシアを経由してきた姉弟	□	●	▲	
7月23日	出勤	マレーシアを経由してきた姉弟+ウズ ベク族男性	□	●	▲▲	
7月24日	休み	マレーシアを経由してきた姉弟 B (C)	□	●	▲	挨拶のため 挨拶のため (※訪ねたが不在)
7月25日	出勤		□			
7月26日	休み					
7月27日	出勤	マレーシアを経由してきた姉弟	□	●	▲	
7月28日	出勤		□ (筆者と)			

## 凡例

ウイグル族	■
Ωレストラン利用	□
女性	●
男性	▲
不特定多数女性	○
不特定多数男性	△
ウイグル族以外	☆

の男性社員1人、そして7人のトルコ人である。この7人は企画が2人、制作が2人、製品運搬が1人、社員・客のためのワゴンの運転手が1人、Web担当が1人であった。このうち企画・制作のそれぞれ1人ずつとWeb担当者との3名が女性であった。この7人の人びとは常駐しているわけではなく、必要に応じて事務所に出入りしていた。Dはその全員とわけ隔てなくむかいあっていた。このように、Dはトルコ人とともに働く人物であった。また男性と顔をあわせる作業も、Dにとっては常態である。食事に関しては、朝は社長がDのためのナンと茶を準備し、昼はウイグル・レストランからの出前をとり、夕は前述したように近くのトルコ料理店から宿舎への配達でまかなっていた。このため、特にこの夕食の点からみて、Dとトルコ料理との接点は比較的多かったといえる。この意味でウイグル族の人びとによるトルコ料理への抵抗も、個人差をもつものであることが示される。

このようにDは住居と会社のその双方でトルコ人とむかいあう。しかしDが仕事場外で顔をあわせた関係をおうと、その中身は変わってくる。表2は、7月3日～7月28日の26日間においてDが仕事場外で顔をあわせた関係を示したものである。そこにみることができるのは、Dが仕事場以外で顔をあわせた関係が、筆者の宿舎がしのために訪問したワクフ（7月5日、7月18日）、友人の友人として同席したウズベク族（7月16日、7月23日）男性の存在を除けば、ウイグル族以外と会うことはなかったということである。そしてそのつきあいには、ある特徴をみいだすことができた。

事例3-3：知人のひとりが、Dへの借金を未返済のまま新疆に帰ってしまったとき、Dは職場から新疆にいる妹に電話をかけ<sup>37)</sup>「彼女の）容貌を知っているでしょう（Chirayni bilisizghu?）」と妹にとりたてを依頼していた（2012年5月22日）。

事例3-3は、Dのトルコにおける交友関係のひとつが、妹も顔を知っているという範囲でおこなわれていたことを示している。このことは、トルコ滞在1年半を経たDのつきあいが、郷里をともにし、かつ妹という血縁と面識を共有する範囲というせまさにおいてなりたっていたことを示している。このような点はDのつきあいの随所に確認できるものとしてあった。

表2の7月10日に出会った人物に、ウルムチ出身の知人の商人女性とその夫という人物がいるが、この商人女性はもともと6月14日時点で、ウルムチにいるDの友人からのDへの贈物を届けに来たというかたちで筆者が知る事ができた人物で

あった。7月10日に彼女がザイトウンブルンの自宅において手づくりの料理による食事をまじえDとのあいだでおこなったのは、彼女がウルムチでの販売を目的に、Dの会社の商品を料金未払いで持っていくという商談であった。話がまとまった日の夜、Dと社長が、商品も売り上げも、何かあればDの家族に送り返さなければいからと話しながら梱包をおこなっている姿をみることができた。ここにみるができるのは、この商人女性がDの友人、そして家族とのあいだの複合的な関係に結ばれ、監視されうる人物としてその行動をなりたたせていたということである。

7月8日には、宿舎EのE1と会っている記録があるが、これは、新疆にいる友人女性の奨学金の手続きを代行することになったDが、事務所を知っているE1を案内役として呼び出したものだった。ここにおける新疆の友人女性とは、Dがトルコにいる関係において唯一友人(Dost)と呼ぶ人物で中国の義烏でDとCがともに働き、かつDとCとの関係をイスタンブールで結びつけた人物であった。彼女はDより先にトルコに来て勉強を始めていたが、このとき出産のために一時新疆に帰っていた。

上記女性はDに2000 TLほどの金を貸していたが、表2の期間中、彼女に金がやり用になったので貸していた金を返して欲しいとやってきたことがあった(7月15日)。このときDには金がなかった。そのためDは、まず新疆にいるウイグル族の友人<sup>38)</sup>に借金の相談をしようとするが、これはDの職場の社長がいやがった。社長は友人に借りるくらいなら自分から借りればいいといいはり、Dが新疆へ電話をかけているときには、わざと背後で聞き耳をたて、借金のお話をしないよう見張ったりしていた<sup>39)</sup>。その金は、近々帰国する予定であったE1に渡してもらうという話もすすんでいたが、この話は金が準備できなかったため立ち消えになった<sup>40)</sup>。このことはE1という人物もDの友人女性ととのあいだで複合的に面識を結びあっていた人物であったことを示している。このときDは筆者にも借金の相談をもちかけてきていたが、額が大きかったために筆者が躊躇すると、最終的には新疆の母と妹から借り、友人女性には妹が直接返しに行くというかたちでことがすまされた。最後の点には社長の妨害はなかった。

また、表2の7月11日～27日には、マレーシアを経由してやってきたウイグル族のキョウダイという人物がいるが、かれらとDとは連日ウイグル・レストランでの食事をともにし会っていた。しかしDはかげではかれらとのつきあいをとていやがっていた。それは、かれらが面倒な人間であり、また昔Dの両親は貧しいという話を知人のあいだでしたからだといっていた。

そこにみるができるのは、表2にみてとれるDのつきあいが、筆者のためと



いう特殊な用事をのぞけば、母親と妹との関わりあいのあいだでのみおこなわれていたという点である。つまり、Dのこのつきあいは、おもに母親と妹が同時にことにあたることのできる範囲で成立すると同時に、そこに影響を与える範囲で維持され、その条件のなかで閉じているということである。そして、Dはそうした人間関係をできるだけ小さくとどめるよう、注意をはらっていた。

事例3-4：筆者が宿舎Eに住みはじめの際、Dが筆者に「“かれら（宿舎Eの少女達）に私のことをいわないで。面倒だから（Ulargha méning ishini dima. Awarichliq.）”」という。（2012年7月18日）

事例3-5：レストランでDが自分の妹の友人だという人物と挨拶をする<sup>41)</sup>。しかしその後、Dは彼女に自身が「妹の姉」だということを伝えていないという。なぜなら「“知りあいになる人物は、少なければ少ないほどいいから（Tonush shnche az bolsa shnche yaxshi.）”」という。（2012年7月16日）

事例3-6：ザイトウンブルンのウイグル食堂のひとつで、買い物中に、Dが店主の男性に新疆での家はどこにあるのかと聞かれ「〇〇路」とこたえる。筆者はDの家が△△路だとわかっていたので、店の外に出た際、なぜ嘘をいったのか？と聞くと、〇〇路には祖母の家がある。だから完全に嘘をいったわけではないという。そして、そうでなければ「“かれらがわかってしまうだろう（Ular biliwaldughu.）”」という。（2012年7月24日）

事例3-4, 5, 6からうかがえることは、ウイグル族同士のあいだで情報を隠しあい、ときには嘘に近い発言も混ぜることで、他者との接点ができることを避けあっていることである。このようにDはそのつきあいにおける他者に反発を示していた。ここにおいて、注意を要する点は、Dはもともとウイグル族同士の間にはいると「“わずらわしい（Awarichliq.）”」とあって、トルコ人との宿舎に住んでいたという点である。Dは、そうしてウイグル族同士の接点を避けていたが、結果として彼女のつきあいは、ウイグル族同士、かつ、母親と妹とが面識を共有できるというせまい関係に内向しているのである。Dの行為は、自身のウイグル族同士のつきあいが不用意に拡大しないよう隔離したものといえ、トルコ人とともに暮らしているが、現在のDのつきあいに、トルコ人が組み込まれていないということは、トルコ人が妹や母親とのあいだの

関係に入りうることはないため、Dの価値観において、それが隔離になるとみなされたと考えられる。つまりDはトルコ人と住んでも「わずらわしい」ことにはならないということを知っていたということになる。そして結果としてそのようなつきあいは成立している。その意味で、Dとトルコ人とのあいだには、同質の秩序にもとづく相互の反発があったという可能性も、また考えることができる点である。同様な点は、A宅の引っ越しにもみることができる。A宅はもともとザイトウンブルン地区にあったが、「(ウイグル族同士の) 話が多すぎる (Gep jiq)””とってファティーフ、そしてスルタンベイリーへと引っ越している。そして、これまでみてきたように、A宅でのつきあいは親族、仕事を中心としたウイグル族同士のつきあいとして、ファティーフ地区での2010年時A宅①、スルタンベイリー地区へと引っ越した2012年時A宅②のあいだであまり変わっていない。AとDとはウイグル族を避け、トルコ人のなかへ飛び込むことによって、結果としてトルコ人とのつきあいではなく、より小さく密なウイグル族同士のつきあいへと内向しているのである。

こうした内向を示すDとのつきあいを成立させようところみたと思われる人物に会ったことがあった。その人物のふるまいを示したものが、事例3-7である。この事例3-7の人物は、表2においてDがくりかえし使っていたレストラン(表2:7月12日~7月28日「Ωレストラン利用」項参照)の店主である。Dは、このレストランを7月3日に会ったウイグル族の男性教師に教えられ(表2,7月3日参照)、その味がいいことから機会をみつけてはここにかよっていた。事例3-7は、そうして13回目に来店したDに、店主の女性からきりだされた7月28日での会話である。

事例3-7:

質問1:「家はどこ?(新疆の・ウルムチの)」(※事例3-6とは異なり、Dは「△△路、□□会社のそばのビル」とはっきりと答えていた。)

質問2:「父母の名前は? (子供の名前は聞かれなかった)」

質問3:「近所の人の名前は?」

質問4:「何人キョウダイ?」

質問5:「父母の仕事は?」

質問5においてコックの夫のほうが、同じ質問でDの父が商売をしていたと知り、「ああ!」と気づいたように手を打ち「“私たちはもともと知り合いだったのだね (Biz eslide tonush ikenmizde.)””という。この会話後、レストランを出たDは「“こういうふうになってしまうの… (Mundaq bop qalidu.)””という。でも事例3-6のようで

はなく本当のことをいっていたという「“かれらはいいい人間だ (Ular yaxshi.)”」という (2012年7月28日)。

ここにみることができるのは、かれらのつきあいは顔をあわせていても成立しないという可能性である。それは事例3-5において、挨拶をかわしていても、妹の姉だといっていなければ、「知り合い」にならずにいられたという点、13回かよっていたDと店主ともこのような会話を必要としたという点から示される点である。事例3-7が示しているのは、Dとのつきあいを確立するためには、Dと関係の近い人間を同定し、共有することであるということが、食堂の店主たちにはわかっており、それをそのとおりに実行したと思われる点である。そこには、Dのつきあいが、妹と母親とのあいだにはさまれていたときに成立していたというものと同質の秩序がはたらいっていたといえる。そうした点から示されるのは、トルコ人という人びとは、いかに近くにしようとも、かれらとのあいだに安定した、複合的なはたらきかけの関係はつくりえないと思われる点である。

こうした閉鎖的な特徴は、新疆から来たばかりの宿舎Eの学生達においてもみいだされた。表3は宿舎Eの8月25日～28日までの23日間の食事とつきあいを記録したものである。宿舎Eでの調査は、ラマザンの約1カ月と丁度重なっていたため、記録は朝と夕の献立と同席した人間関係についておこなっている。断食は、宿舎のメンバー全員がおこなっていた。

表3から示されるのは、宿舎Eの学生たちが、ラマザンの期間の食事を、4人のウイグル族の友人(友人①～④)<sup>42)</sup>をくわえた人数をほぼ最大とし<sup>43)</sup>、ウイグル族同士で、ウイグル料理のみをかこむことですごしていることである(表3「夕食をめぐる備考」項参照)。それはA～Cにみられた結果と同質の特徴であるといえる。かれらはこの期間、ウイグル族の教育機関がくばる食事券により、夕食をウイグル・レストランにて無料でとることができた(表3「夕食」項参照)。そのため、夕食は無条件にウイグル料理をとることができた。しかし、夜明け前の食事という、前日からのごしらえと、2時間早い起床による調理を必要としても、かれらは手づくりでウイグル料理を準備しつつけていたのである(表3「朝食」項参照)。かれらにもトルコ人との交流や、外部からトルコ料理をとり入れるという姿勢をみることはできない。

ただ宿舎Eのデータの特徴には、A～Dにはない特徴的な点を1点みることができる。それが、おもに宿舎を所有するワクフをとおした、トルコの一般家庭からの食事の招待という機会がある点である。こうした周囲のトルコ人との食事の場の共有と

表3 E 宿舎の8月5日～8月28日(ラマザン)の23日間にみる食事とつきあい

月日	朝食	夕食 ※招待以外はΩレストラン	夕食をめぐる備考	招待の内容
8月5日			■下階のトルコ人家庭から差し入れ「誰が食べる?」「無駄になる」と言いあっている。	
8月6日	ポロ	粉湯(フェンタン)		
8月7日	ガンパン	スユカシ	■もらった料理が全て腐る。笑顔で鍋を帰す。	
8月8日	ポロ	招待	▲招待トルコ人家庭からボーレックをもらう。	ワクフを通じたトルコ人家庭からの招待 ※E2と筆者のみ参加
8月9日	ポロ, 米飯, サイ炒め	マンタ		
8月10日	マンタ, サモサ	大盤鶏	友人①②③④と同席。	
8月11日	ポロ	招待	◆向かい家庭から残ったスープ(チョルバ)を鍋でもらう(E4のみ友人①②③と同席)。	向かいの家庭からの直接の招待 ※E4はE4らとともにΩレストラン
8月12日	ポロ	ソーメン(※招待)	友人①②と同席。	ワクフを通じたトルコ人家庭からの招待 ※E2のみ参加
8月13日	ソーメン(昨日の残り)	大盤鶏	友人④と同席。	
8月14日	ガンパン, 芋サイ	ラグメン		
8月15日	ソーメン	招待	▲◆ボーレック, チョルバが完全に腐る。	ワクフを通じたトルコ人家庭からの招待 E3, E4, 筆者参加, E2は母の友人宅へ
8月16日	ポロ	マンタ・ポロ	友人①②③と同席。 E2, 母の友の娘が出産したとのことでアンカラに行く。	
8月17日	マンタ, ポロ	丁丁ソーメン	友人①②③④と同席。	
8月18日	丁丁ソーメン	大盤鶏, 麺	友人②と同席。 夜半にE5 新疆より帰着。	
8月19日	ナン, 牛乳, 卵2個	招待		ワクフを通じたトルコ人家庭からの招待
8月20日	大盤鶏	コルダック	友人①②と同席。	
8月21日	コルダック	丁丁ソーメン	(この日は誰も来ていない)	
8月22日	大盤鶏	コルダック	友人③④と同席。 食堂で2人の女の子(関係聞けず)と同席。	
8月23日	2つのサイと米飯	招待		ワクフを通じたレストランへの招待 E3, 筆者参加※E4参加せず
8月24日	サイ・米飯	ラグメン	E2, アンカラより帰着。 友人①②③と同席。	
8月25日	ラグメン, マンタ	大盤鶏		
8月26日	大盤鶏	ソーメン	友人①②③と同席, その後宿舎Eに宿泊。 ※モスクでカディル・ゲジュエイーをすごしたため。	
8月27日	ポロ	ピッティル・マンタ	※朝食友人①②③と同席 友人①②と同席	
8月28日	ラーズジー, 米飯	大盤鶏	友人①②③と同席。	

※夕食のレストランでの料理はたびたび持ち帰りにし、朝食にもしている。

※備考における■▲◆は、ひとつの料理をもらってから腐るまでの経過に対応。

※料理の内容については表1と同様本稿では割愛する。

いう機会はラマザンの期間以外にはみることができなかった。それは表3の8月11日において、アパートの同じ階の家庭による招待の場において、かれらが中国新疆のウイグル族であるということを紹介しあっていた様子からもみいだすことができた。かれらは滞在6ヶ月目にして、このイスラームの祭時に、初めて近所のトルコ人と向きあう機会をもっているのである。

ワクフをとおした招待の場は、小規模なものから大規模なものまでさまざまにあった。たとえば、8月8日に集まった14人（マケドニア人5人、カザフスタンのトルコ人1人、クルグズスタン人1人、ウイグル族2人と引率のトルコ人女性とその娘4人+筆者）、8月15日に集まった20人（アルバニア人4人、マケドニア人3人、ジブチ人3人、バングラデシュ人1人、カザフスタン人2人、ウイグル族5人、引率のトルコ人女性1人+筆者）、8月19日の6人（チェチェン人1人、ウイグル族4人+筆者）である。そこにはイスタンブールにあつまる学生身分にあるムスリムの多様さと、そうした人びとを一堂に集める機会となっているイスラームの祭時という点をよみとることができる。しかしそうした機会において、宿舎Eの人びとにみられたのは、かれらがこの会食をきらい、できるだけ参加を避けようとしていたことである。宿舎Eには、ワクフからの連絡をうける人物がひとりおり、それは8月15日まではE2、それ以降はE3がうけもっていた。かれらにみられたのは、ワクフから直接連絡を受ける連絡役の人物のみはそれを避けえないものとして、参加をしているが（表3：8月8日：E2、8月12日：E2、8月23日：E3）、それ以外の、こうした話を直接耳にする立場にない人びとは、こうした場をできるだけ避けようとしていた点である（表3「招待の内容」項8月8日のE3・E4、8月11日のE4、8月12日のE3・E4、8月23日のE4）。かれらは、行っていやな顔をしつづけたり、食べずにいたりすることはないが、裏では押しつけ合って、避けてばかりいたのである。

かれらのそうした拒否の姿勢がもっとも具体的にあらわされていたのが、かれらが好意でくばられるパンやスープなどを、宿舎にてまったく手をつけることなく、結果的に廃棄していた点である（表3：■8月5日もらう→■8月7日廃棄、▲8月8日もらう→▲8月15日廃棄、◆8月11日もらう→◆8月15日廃棄）。このうち8月5日のものは、下階のトルコ人家庭からの差し入れであった。それは5人が十分に食べられそうな分量の、鍋に入った手づくりのスープ、ナスの煮込み料理、炒めごはん、市販パッケージのアイラン（AYRAN：ヨーグルトの飲み物）という料理であったが、かれらはこれを笑顔でうけとりながら、もらったその直後から、すでに廃棄の可能性を話していた。これは、トルコの家料理という珍しい献立を前に喜んでいた筆者を

驚かせた。そしてかれらは事実、それらにまったく手をつけることなくその後もウイグル料理をつくりつけ、鍋の中身を台所に放置していた。そして下階の少女がその鍋を引き取りにきた際には、裏で中身を掻きだして洗い、笑顔とキスとともにこれを返却していた（8月7日）。

E2はこの期間、ラマザンを喜び、招待の会食へとむかう道で、ラマザンをする意味を「食べ物を無駄にせず、空腹の人の気持ちがわかるようになる」と筆者に語ってくれた（8月8日）。かれらにとって、トルコ人の料理を廃棄するものとするのは、「食べ物を無駄に」していることにはならないと考えられるのである。あるいはE3は、ラマザンを評価する語彙を、社会的にみる事実とは切り離して、コラーンのことばをあてはめたと考えることも、また可能であると考えられる。

### 3.3 「ムスリム」のなすべきこと

これまで人びとのつきあいがウイグル族にかぎられ、ウイグル族であってもそのうえでさらに狭い間柄にかぎられたものとして構築されていることを確認してきた。それは、トルコでの滞在が比較的短い単身者や学生から、在住8年から10年という人物であろうとも、変わらない内向きのつきあいの傾向であったといえる。こうしたかれらのつきあいにおいて、トルコ人という人びとは、まったくみられないわけではなかった。しかしかれらがあらわれると、そこではウイグル族同士の関係においてはあまりみられないイスラームのモチダサレカタがあることをみいだすことができた。

事例3-8：A宅：A「“大家は普段礼拝をせず、金曜だけ礼拝をする人間だ（Öyning igesi namazni oqumay jumedila oquydighan adem）”。そして保証金返さない。」（Aと客人女性との会話 2010年3月3日）

事例3-9：A宅：A「“大家は礼拝をしない人間だ（Öyning igesi namazni oqumaydigen adem.）”」Aの兄「それは悪い人間のような（Eski adem ge oxshaydu）」（2010年3月5日）

筆者がはじめて事例3-8を聞いたとき、それが非難の表現になりうるのかと考えさせられた点である。ゆえに、事例3-9において、Aの兄が即座に「それは悪い人間～」をつづけたとき、強く印象に残った点であった。こうした要素の取り上げは、親しくない他者への頼みごとの際にもまたみいだすことができた。

事例 3-10：A 宅：A の夫の友人男性「“クルグズスタンのウズベク族女性②の雇い主（トルコ人）はスカーフをしているのか？（U yaghliq chigamdu?”）」クルグズスタンのウズベク族女性①「“ああ。ハッジもしたようだ（Hee, hajimu qilghan.）」」（2010年3月13日）

事例 3-11：A 宅：クルグズスタンのウズベク族女性①「“クルグズスタンのウズベク族女性②の雇い主（トルコ人）はいい人間だろうか」A「“ハッジもしたそうだし、信じられるのではないか（U hajimu qilghan, isheniyalaydughu deymen.）」」（2010年3月16日）

事例 3-9, 3-10, 3-11, 3-12 にみいだされるのは、かれらの近しい関係のつきあいにおいては2次的な扱いをされていた礼拝やスカーフの着用といった要素が、その外部に位置する人間に対しては価値をみいだされていることである。こうした規範的な行為を基盤としたかたりは、D にみる、以下の事例においても確認することができた。

事例 3-12：会社の商品のカタログ用写真の撮影日：ラマザンの初日だったが、撮影をするトルコ人達は誰もラマザンをしていなかった。昼に、カメラマンが昼食の入った紙袋を手にもち裏にまわろうとしながら、D に「怒らないで（Hapa bolmang.）<sup>44)</sup>」と声をかけた。D は「“あなたの取り分を許されてとってください（Hekkingizni halal iting）」とこたえる。そして撮影結果に対して「とても美しく撮れた」「あなたの仕事にベリケット（恵み・救い/Beriket 語源：アラビア語）がありますように（Beriket bolsun）」という。そして帰り道の車の中でD が社長に「よく撮れていなかった（Yahxi tartmaptu.）」「“かれはラマザンをしていないよ（Adashingiz ramzan tutimaydu.）」という（8月1日）。次の日筆者がどうしてあのような本心でない感想をいうのかと聞くと「よく撮れてなくてもよく撮れていたというのだ。よく撮れていないといったところで誰も喜ばない。だが2度と行かない。」という（2012年8月2日）

事例 3-12 にみることができるのは、まず 3-8, 9, 10, 11 に通じる点として、D によるカメラマンへの非難が、ラマザンという点に依拠しておこなわれていることである<sup>45)</sup>。そしてそれはまた、ラマザンをしないカメラマンの前では許しのこととなり、評価と非難という両面をつくりながら、一時的であれ、他者とのあいだに穏便な関係をつくりだしていたといえる。そこには、かれらの社会性がことばの不確かさを

イスラームで共有しながらその場を精算するという方向性へよりあわせられているというようにみいだすことができる。こうした他者とのあいだのこの局面は、Dを含めた人びとが、“ムスリム”を語る場面において、重要な側面としてあった。

事例 3-13：Dの宿舎への長期滞在が認められなかった後も、しばらくDの宿舎に通っていたころ、宿舎管理をしている女性（Dらと同年代）が筆者をみつめて目を細めて睨んだ。筆者としては当然のことだと思ったので、Dに「彼女に睨まれてしまった」というと「“ムスリムは本来そういう態度をしないべきなのだが（Muslman eslide undaq muamile qilmasliq kérek.）”」といわれる（2012年7月15日）

事例 3-14：レストランからの帰り道、Dが「ムスリムとして、やらなければいけないこと、やりたくてもできていないことがたくさんある」と嘆息する。筆者が「何がしたい？何かできるなら、どうしたい？」（筆者→着衣や礼拝をもっとただしたい、という側面かと考えた）「“態度（Muamile.）”」「他の人にもっといい態度をとれるようになりたい」（2012年7月28日）

事例 3-13 が示しているのは、筆者が事実「迷惑な行為をしている」ということに対し、Dがムスリムとはそうした点とは関係なく、表面に気をを使うべきだと述べているということである。このことは、Dが彼女をめぐる社会性において、個々人の関係性の外縁をどこに見定め、社会的な努力をどのようなかたちでどこに求めているのかを示していたように思われる。そして事例 3-14 に示されているのは、Dが「ムスリムとして」やらなければいけないということをそうした「態度」であると述べていることである。それは、事例 3-13 を含め、ムスリムであるということが、Dをめぐることは、何よりもそうした社会的努力として理解されていたということを示している。こうした社会的姿勢がイスラームであるとするかたは、別の人物による会話においてもみいだすことができた。

事例 3-15：E友人②が宿舎 E2～E4 との会話において「“宗教（イスラーム）をしっかり知っている人間の顔は、どんな人が来てもこんなふう（ジェスチャー）にっこりと微笑んでいる（Dinni pishshiq bildighan ademning chiray kim kelsemu mushndaq tu.）”」（2012年8月28日）



事例 3-15 が示しているのは、かれらが、少なくとも E の友人②にとっては、おそらく人びとが関係性の外にある人間に対し通常はそれを排除するふるまいをしているということである。そして、それを変える力として、たとえ表面的であろうとも、そこに修正を要請する力として、宗教的価値を措定しているということである。こうした場においては行動的な「規範」は、再度かれら自身の自己肯定にとまなう否定の対象になっていた。

事例 3-16：E 友人③「“スカーフや長い衣服は私たちに必要なことじゃない (Yaghliq, uzun könglek, bizge shert emes.)”」(2012 年 8 月 16 日) ※E 友人③は礼拝時以外にはスカーフと長衣を身につけない人物で、この会話はスカーフや短衣・長衣を身につける E2, E 友人①②を前におこなわれていた。

事例 3-17：E 友人③「“一番大事なものはスカーフじゃない。他人に悪い目的をいっていない。これも信仰心だ (Eng muhim yenglik emes. Xeqqe yaman niyet yoq. Bu mu iman.)”」(2012 年 8 月 10 日)

事例 3-18：E3「“他人の持っている悪い目的を知ることなどできない。それがどんなものであっても (Yaman niyet bolghilini bilghili bolmaydu. Néme bolsam.)”」ゆえに、E3 は「“誰に会っても、何をいわれても、ああそうああそう、と笑っていることにしている。相手の悪い目的はアッラーが知るだろう (Kim kelsemu néme désem hee hee dep turmen. Uning yaman niyet ni alla bilidu.)”」という。(2012 年 8 月 16 日)

事例 3-19：D の社長「“(トルコ人とは) 仕事はできる。でもトルコ人には力は届かない (Ish qilalaydu, lékin turklargha küch yetmeydu.)”。仕事は 7 割の人間とはできる、でも心もトルコ人には届かない、友達もトルコ人には 1 人もいない。そのなかでも“イスラームに近い人間とならトルコ人とでも少しはわかりあえる。それでも私たちはあまり関係しあわない (Eger u Islamgha yéqin bolsa chüsheniyeleymiz. Lékin biz anche arilashmaymiz.)”」(2012 年 7 月 10 日)

事例 3-15, 16, 17, 18 にみることができるのは、かれらにとってイスラームとは、かれらひとりひとりとそのつきあいのほかに、内と外をつなぐ関係性にやどるものとして考えられているという点である。そして事例 3-19 は、かれらという人びとの、

内向し、容易に同化へとは向かわない人びとのつきあいのありかたを認め、そうしたことばであることと表裏一体となって、イスラームがこれからもかれらに必要とされ、その社会性を広げる機会を与える機構として存在し続けていくことを示しているように思われる。

## 4 結論 かれらの社会性

### 4.1 正しさのラベル

本論でみてきたのは、イスラーム圏に移動したはずのウイグルに「ハラール」の問題があり、かれらの多くがウイグル料理を中心とした手づくりの食事をしてきたことである。かれらの「豚肉」ということばをめぐる行動は、かれらが規範にしたがっていたのではなく、かれらのもつ不信に「豚肉」というイスラームのラベルをあたえていたものとしてみるのができた。そこには、ムスリムの住む土地であれば、食事の問題は発生しないといった「規範」としての解釈はあてはまらなかったといえる。

本論は、2章において、エジプトというイスラームの国の生産した食品を信じず、企業を信じず、またアーリムというイスラーム知識人にしたがわず、イスラームをめぐる印刷物に依拠しない人びとがいたことを示し、かれらが近い隣人のごとばをもとに状況をすりあわせることで、自身のイスラームの選択をおこなっていたこと確認してきた。そうした情報のとらえかたに示されたのは、まず1点目にかれらは、「社会的に正当な知識」が存在しうると考え、それを参照し、自己を律するということをしていない、またはできない人びとであるということである。

かれらがイスラームをめぐっておこなっていたのは命名され、規範化された「知識」にてらしあわせ自己を律するという行為ではない。ではかれらは、イスラームをとおして何をおこなっていたといえるのか。かれらはまず1点目に、情報を「知識」とみなすことのない場において、自身の行為が正しい判断をしていることを示すことばを必要としていたと思われる。そうして人びとは目の前にある状況から「よりよい」ことを個々人で選びとる行為をおこなっていたと思われる。それは同時に、不信にみちた社会において、隣人とのあいだで信じられる情報を手探りでさがしだす行為でもあった。それは「正答」のない場での「よりよい」判断にあてられるものであったといえ、それゆえにこの豚肉というラベルは、事実ではなく目の届く範囲でつくられた「安心できる」食べ物とそれ以外をわけるものとして機能していた。それが「食

べない」行為に対する「豚肉」であり、また正しい行為としての「サワップ」、罪としての「グナフ」であったと考えられる。それは正しさを選ぶ個々人の選択行為そのものに与えられた、合意を欠いたラベルである。そこにはラベルと客観的事実の結びつきや、そこに形成されるなんらかの共通合意はなかったといえる。

そうしたことをめぐる人間の側にみいだすことができるのは、情報的に孤立した個々の立場と、そうした孤立した場所をスタート地点として、「よりよい」ものを選びとろうと動き出す人びとの姿である。そして、かれらの「よりよい」を判断するの基盤になっているのは、何よりも自己を益するものであった。

「単一の規範」(大塚 1989: 142-143)とは対極のものとしてイスラームを位置づけるこのことばとそれをめぐる人びとのありかたは、ことばというものが人間にとってどのように社会的に存在しうるのかという多様性のひとつを示していたと考えることができる。それは文字情報を規範と考えたこれまでの研究者の思考の経路をも相対化する、社会的に知識にラベリングをほどこすという方法を欠いた社会で結実した、ことばのありかたというものを示していたと思われる。

## 4.2 社会性の輪郭

本論では第3章において、かれらが、住居では、ウイグル料理をともにした、少数のウズベク族とウイグル族にかぎった小さなつきあい関係を維持していることを確認してきた。それは、住居としてみた場合、他者の存在をつねに迎え入れる住居という場の機能に反して、きわめて閉鎖的なものであるということができた。かれらのつきあいは、信頼できる人間同士の相互関係間に参入することによって、自身の要求を複数の方向からなげかけることのできる関係に入ったときになしとげられていた。それは、個々人が個々人の益にしたがって生きるという生きかたの方向性を制する方法のひとつではなかったかと思われる。それは、かれらの社会性が内をむいて、かれらとそうした関係にあるのか、ないのかという枠組みによって形成されていることを意味している。それは、ひとりひとりをめぐってつくられる関係の集まりである。イスラームは、そうした場所において、かれらにとって、かれらひとりひとりの「よりよい」選択を肯定し、そのうえで、かれらのその閉じようとするつきあいをひろげていこうとする役割をはたしていた。本論は第2章において、他者が自分に対してとるべき正しい行為が、スカーフや礼拝よりも重要だとかたられていた点、第3章において、かれらが「ムスリムである」とする価値を、「態度」をめぐる点にあるとすることを示してきた。それは、人びとの意識が、イスラームが食事規定や儀礼にあるのではな

く、何よりもまず、かれらを守る関係性をつくるものとしてあり、同時にかれらを守るせまいつきあいのあいだで、閉じあおうとする関係性をひらく、かれらという人びとのつきあいの輪郭の所在をうつしだしたのものとしてあったと述べるができる。しかし後者はかれらの内向する姿勢とは反発しあい、「イスラーム」がわかっていないから「他者」とはつきあえないということばを生んでいた。それはイスラームが今後かれらに必要とされつづける関係の枠組みとして存在していたことを示しているように思われる。このようなことばと人びとのつきあいのありかたは、かれら特有のものなのであろうか。

### 4.3 イスラーム圏の類似

本論は第1章第2節で、カイロの知識人によるそれまでにない服装が「イスラーム的」とあるという言説が、個々のイスラームを「主観的」に表現する記号（大塚 1987: 394）、つまり自己肯定であるにすぎず、そこからイスラームとしての「正統的見解」（大塚 1978: 394）を導きだすことは容易ではないとしてきた点を指摘してきた。そこにみいだすことができるのは、自己肯定であるがゆえに、一般的回答を導きだせないカイロの人びとの「イスラーム的」現象であり、一般的回答を必要としていた、日本人研究者の姿であると思われる。

こうした点は嶺崎による、カイロのイスラーム知識提供をする電話機関の分析において、質問者が「わがまま」（嶺崎 2009: 31）で「シャリーアを自分に有利なように解釈し、利用したい」（嶺崎 2009: 31）という欲望が透けて見え、同時に質問に答える側のアズハル大学のウラマーという人びとも「シャリーアでは合法行為（halal）」（嶺崎 2009: 21）でも、それをまげて「社会慣習」（嶺崎 2009: 21）や人びとの「福祉」（嶺崎 2009: 21）に沿った知識提供をおこなっている点のなかにも見いだしうることであると思われる（嶺崎 2009: 26）。嶺崎は同時に、そこでは学派間の相違といった「知識」に対する質問がほとんどなく（嶺崎 2009: 28）、それがイスラームの「知識」を知るための機関ではないこと、そしてそこに海外在住エジプト人からの質問はあっても、エジプト人以外からの質問は非常に少ないという（嶺崎 2009: 27）、機関のニーズが民族的な内向性にささえられていることを同時に指摘している。

人びとのイスラームが、自己の正当化の語彙であるという点は、中山によるトルコの民族誌にも指摘されている（中山 1999: 77-78）。中山は、トルコの農村でトルコの首相候補について女性の候補者はどうかと話していた際「すぐさまある男性（35歳）が否定し、「われわれの宗教では女性は指導者になれない」と言い切った。筆者が

「パキスタンの首相も女性です」と言うと、その男性は、それもそうだなという表情をしたが、その言葉を撤回しなかった」（中山 1999: 77-78）といった場面を記述している。そこには中山による「ムスリムの国」の事実を事例にした指摘の方法が、現地の男性の前では空回りしていた様子が示されているといえる。そこから示されるのは、このトルコ人の男性が自己の意見の正当化以外には関心がなく、それを社会的合意にもとづいて修正するという思考経路が欠けていたと思われる点である。「われわれの宗教では」ということばが人びとの社会的な自己正当化となっているということは、同じくトルコのフィールドワークをおこなったデラニーも指摘する点である（Delaney 1991: 285）。

また、エジプトのカイロの庶民の女性を調査したスウェーデンの人類学者ヴィカンは、イスラームをめぐる記述はほとんどしていないものの、カイロの庶民女性たちが信頼と不信から小さな集団に分かれ「借金をするときは、注意深く、完全に信頼できる人からしか借りない。それが不可能であれば、同じビルや同じ通りに住んでいる人からは、借りない」（ヴィカン 1986 [初出は 1976]: 198）という閉鎖的な関係に生きていること、そして、そこにおける人びとの会話が「現在ある人間関係を正当化するもの」（ヴィカン 1986 [初出は 1976]: 202）にすぎず、「情報の価値としてはまったく2次的である」（ヴィカン 1986 [初出は 1976]: 202）「女性たちは、ひとつの出来事を Y との関係が変わるたびに違ったように表現する」（ヴィカン 1986 [初出は 1976]: 202）「自分の社会関係の質を表現することを目的としたものであり、聞き手にとっては、その話に同意するか否かで、語り手との関係を確認するか、そうでなければ否定する、という以上の意味はない」（ヴィカン 1986 [初出は 1976]: 202）としている。そこにみられるのは、イスラームを越えてみいだされる「正しさのラベル」としてのことばと、人びとの不信に満ちた閉鎖的なつきあいである。

こうした点は、特にイスラームをめぐる点として、たとえばパキスタン人と結婚した日本人妻が、スカーフや衣服といった点において、パキスタンよりサウディアラビアのイスラームこそを正当なもののみなし（工藤 2008: 160, 165）、「ヒジャーブで頭を覆う」（工藤 2008: 157）ことを覚えることによって、「まじめでない」「にわかムスリム」（工藤 2008: 158）が「「ちゃんとした」ムスリムのモデル」（工藤 2008: 158）へと変化していく、「リニアなプロセス」（工藤 2008: 157）として思い描いていること、その結果パキスタン人の夫より、自身のほうが「正当なイスラーム」（工藤 2008: 164）「本来のイスラーム」（工藤 2008: 161）を学んでいるとし、パキスタン人の夫との関係性の乖離という機会などは、むしろ彼女らの「イスラーム化」を促進する機会

となっていたという（工藤 2008: 137）日本人ムスリムの姿とは対極に位置しているといえる。

本論は、比較的限られた対象から導いた結論ではあるが、アラブとトルコ、そしてウイグルとの類似において、個々人の範囲をこえたイスラームを形成することをしない、あるいはできない社会と、「正当なイスラーム」を、個々人を越えてみいだそうとすることのできる社会とを区別する必要があると考える。それは、ムスリムという人びとの存在を「ことば」の扱いからわけていくことができるということの意味し、イスラームと人びととを、もはや「規範」からではなく、地域・民族的な条件から分析していくことが可能であるという視点を示唆するものである。

## 謝 辞

調査を支えてくれた D に、調査から論文執筆までの私を支えてくれたすべての方々に、そして極めて有益なアドバイスを幾度も誠意をもって示してくださった査読の先生方に心からの感謝を奉げる。

## 注

- 1) 本論では国民として国別単位で扱った人びとを「人」、国民ではない同質の単位を想定して扱った人びとを「族」として表記した。
- 2) 例えば公務員、学生のモスクへの出入り、職場、校内での礼拝、断食、女性のスカーフ、長いスカートの着用などの禁止等である。
- 3) 主に難民であることの申請による。欧州空港に到着後、パスポートを捨て、難民を申請することは頻繁に人びとの話題となっていた。筆者は調査期間中に実際にそうしてトルコから移動し、またトルコに再入国してきた人物がいたことを幾人か確認している。
- 4) ザイトゥンブルンは日本語では「ゼイティンブルヌ」と表記されることが一般的だが、本論では現地のウイグル族の人びとの音により近いものとしてザイトゥンブルンと表記する。なお、現地の音に準ずる点はイスラームをめぐる用語（コーラン→コラーン）についても同様のものとする。
- 5) ウイグル族のつくるパン。2012年調査当時この店でナンを焼いていたのはアフガニスタン人だった。
- 6) 2010年時点で、トラム沿線上のチャパ（CHAPA）にウイグル族によるトルコ語学校が一軒あったが、2012年9月にザイトゥンブルン地区に移動した。こうした学校はアパートの一室を借りて開校しているため、移動も容易で、実際に頻繁に移動する。このほかウイグル族によるウイグル料理の食堂が、同トラム沿線上アクサライ（AKSARAY）に2軒、トプカピ（TOPKAPI）に1軒あった。またそれ以外にも、涼皮子 Liángpízi（漢語）といった新疆の食品の売り買いが一般家庭のあいだでおこなわれている。こうした一般家庭での販売は、法的な認可といった点とはかかわりあいがなくおこなわれる。
- 7) 本論であつかう調査家庭にも、市中心部から約30 km離れたスルタンベイリー地区に住居のある世帯がある（A宅）。この世帯の詳細は後述。
- 8) A～Eのうち、Eはひとつの宿舎に住むE1からE4までの4人にあてたためA～Eで8人になる。EにはE5もいたが、E5と筆者がすごした時間はとても短かったため、本論ではE4までの8人とした。
- 9) ウイグル民族医についてはサキム（1999）参照。

- 10) この店舗の位置は2010年調査時より変わらず。
- 11) ウムラは「マッカ巡礼の一種、ハッジと区別されて小巡礼と呼ばれる。」(大塚2002:203)
- 12) ジェルバップは、イスタンブルのウイグル族のあいだでは、全身を黒い布で包み、顔を三角にあけた服装のことを指していた。この服装は、たとえば筆者が「Cにスカーフを贈ろうか」というのに対しDが「彼女はジェルバップだ。スカーフは使わない」というというようにスカーフとは異なる布のかぶりかたというように示されていた。なおこのジェルバップという単語については『ウイグル語詳解辞典』(Ékber 1999)には記載がなかった。
- 13) この会社は商品の発注を中国の工場におこなっていたが、社長のウイグル族の人物は中国語が話せなかった。そのためDはおもにその仲介の仕事をしていた。
- 14) 預科とは、中国における大学進学前の民族学生の漢語研修期間を指す。
- 15) ワクフはイスラームの財産寄進制度。それにより設定された財源、ならびにその運営組織を指す場合もある(林2002:1076)。
- 16) 礼拝前の浄め。本稿では詳述を避けるが、E3を除けばほとんどの人物は省略した洗浄をおこなっていた。この洗浄に常に30分をかけていたという人物は、筆者はE3以外には確認していない。
- 17) かろうじてBがAとAの夫のことを情報として知っていたが、これはBがウイグル族の互助機関の人間として、広範囲な人間関係に目をくばっていたことによる。
- 18) ウイグル語でいう *Soguc sey* (冷菜)。
- 19) C宅では、夫がいるときは、C宅の方針で、筆者は別室からでていかにないようにしていた。
- 20) アラビア語でいう「ライラ・アル＝カドル」のトルコ語。『岩波イスラーム辞典』によれば、「預言者ムハンマドに初めて啓示が下されたとされる夜」を指し、「ラマダーン月の最後の10日のうち奇数日の1夜であるといわれているが、27日の夜とする学者が多い」(青柳2002:1034)とされる。
- 21) アラビア語でいう「ラマダーン」(森2002:1044-1045)。ウイグル語では *Ramzan* (Ékber 1999:552) トルコ語では *RAMAZAN* (Yurtbaşı 2009:1124)。
- 22) アーリムは「イスラーム諸学を修めた知識人」(小杉2002b:204)をさす。
- 23) E友人①は、この日のことを、夜寝ないでコーランを読み続けると、これまで犯した罪のすべてが洗われる日といていたが、E2は“ラマザンの最も偉大な日 (*Ramzanning eng ulugh kunisi*)”といい、Dはまた、それが特定の日ではなく、自分は10日間毎晩礼拝するつもりだといっていたなど、それをめぐる知識もばらつきがあった。
- 24) 宿舍のトルコ人女性が誕生日だったため、散歩に行くというのに筆者がさそわれ、Dがそれに同行してくれていた。
- 25) グナフは、もうひとつのウイグル語のヤマン *yaman* と並び、同じ「よくない行為」をあらわすものとされている。しかし事例2-11、また、のちの事例2-13にみられるように、サワップの対比として示されることばはつねにグナフであった。そのため、本論では、グナフをサワップに対応することばとみなしてあつかう。
- 26) この3人目のこのメンバーは、礼拝もせず、スカーフもしない人物だった。彼女は、彼女の姉はスカーフをするが、自身はせず、またDとはイスラームについてしばしば語りあうということがみられた人物であった。
- 27) かれらの生活実感にとって、スカーフの着用といった表象が2次的重要度しかもたない可能性があるということ、トルコ農村を調査した中山も指摘している点である(中山1999:203-204)
- 28) 事例2-20への見解は男性、つまりDの職場の社長にとっては、違った可能性があるが、Dという女性にとってはそうであったといえる。
- 29) 週6日間労働×1ヶ月(約4週間)。
- 30) 7月19日におこなわれたこの会話は、途中でけがをした猫をみつけたため、後の会話が中断されてしまった。
- 31) ウズベク族は新疆および旧ソ中央アジアに住むトルコ系のオアシス定住農耕民であった人びとで(小松1995:195-196)、ウイグル族とは言語も文化も近似する。
- 32) 出産直後だったC宅では、小児医学の心得があるというこの女性(Bdu)が頻繁にC宅をおとずれ新生児の様子をみてやっていた。
- 33) Cは大学(中国・南京)在学時の漢民族の学生や教師との思い出をひとりひとり名をあげ語ってくれた。Cは卒業後もそうした人びととEメール等で親交をつけようとしていた。しかしつづかなかつたのだとかたっていた。このことは、かれらがそうした人びとのつきあいを積極的に切り離してきたのではなく、何らかの理由にもとづきつづかなかつたという

- ことを示唆していると思われる。
- 34) 小麦粉製品店の売り物で、焼いていない生の状態のもの。
  - 35) たとえばトゥルメル Türmel (Abdukérim 1996: 44)。
  - 36) 湯に溶かして加熱するだけのものだった。
  - 37) 職場のパソコンのインターネットによる電話で、無料だった。
  - 38) この人物も義烏で仕事をともにしていた人物であった。
  - 39) 社長はこのとき D に求婚中だった。
  - 40) 実際に E1 が帰国する際には、D からその友人女性へ贈物としてトルコの粉ミルクが託された。
  - 41) この挨拶は握手をしてから左右の頬をつけあうもの。
  - 42) かれらは宿舎 E のメンバーと立場、年齢が、ほぼ相同。
  - 43) 例外は表 3、8 月 22 日の筆者が関係を聞けなかった少女 2 人のみ。
  - 44) この会話はトルコ語であったが、記載は後に D がウイグル語に訳して説明してくれたものを示した。
  - 45) 筆者が 8 月 14 日になってしばらくぶりに D に会った際、D はラマザンをしていなかった。D は空腹で眩暈がするようなら食べてもいいのだといい、食堂にはいり、筆者にも食べると促した。

## 参照文献

- Abdukérim, R.  
1996 *Uyghur-örp-adetliri* (Uyghur's customs and habits). Shinjiang-yashlar-ösmürler-neshriyati, Ürümchi.
- 赤堀雅幸  
1997 「死をめぐるイスラームの儀礼」孝本貢、八木透編『シリーズ比較家族 9 家族と死者祭祀』pp. 189–216, 東京：早稲田大学出版部。
- 青柳かおる  
2002 「ライラ・アル＝カドル」大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』p. 1034, 東京：岩波書店。
- Delaney, C.  
1991 *The Seed and the Soil: Gender and Cosmology in Turkish Village Society*, Los Angeles: University of California Press.
- Ekber, É (ed.)  
1999 *Uyghur Tilining Izahliq Lughiti* (Uighur Language Annotative Dictionary). Shinjiang-Xelq Neshiriyati, Ürümchi.
- 濱田正美  
1995 「ウイグル族」松原正毅編『世界民族問題事典』pp. 178–179, 東京：平凡社。
- 林佳世子  
2002 「ワクフ」大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』pp. 1076–1078, 東京：岩波書店。
- 本多勝一  
1984 『アラビア遊牧民』東京：朝日新聞出版局。
- 池内 恵  
2001 「イスラーム世界における政—教関係の二つの次元」酒井啓子編『民族主義とイスラーム—宗教とナショナリズムの相克と調和』pp. 69–112, 千葉：日本貿易振興機構アジア経済研究所。
- 片倉もとこ  
1979 『アラビア・ノート—アラブの原像を求めて』東京：日本放送出版協会。  
1991 『イスラームの日常世界』東京：岩波書店。
- 加藤 博  
2002 『イスラーム世界論—トリックスターとしての神』東京：東京大学出版会。
- 小松久男  
1995 「ウズベク」松原正毅編『世界民族問題事典』pp. 195–196, 東京：平凡社。



- 小杉麻李亜  
 2007 「イスラームにおけるサラール（礼拝）の総合的理解をめざして——中東と東南アジアの事例を中心に」『イスラーム世界研究』1(2): 165–209。
- 小杉 泰  
 2002a 「イスラーム研究と南アジア」長崎暢子編『現代南アジア〈1〉地域研究への招待』pp. 189–213, 東京：東京大学出版会。  
 2002b 「ウラマー」大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』pp. 204–205, 東京：岩波書店。  
 2002c 「ハラール食品」大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』p. 785, 東京：岩波書店。  
 2006 『現代イスラーム世界論』名古屋：名古屋大学出版会。
- 工藤正子  
 2008 『越境の人類学——在日パキスタン人ムスリム移民の妻たち』東京：東京大学出版会。
- 熊谷瑞恵  
 2011 『食と住空間にみるウイグル族の文化——中国新疆に息づく暮らしの場』京都：昭和堂。
- 前川雅子  
 1991 『アラブの人びと——クウェートに住んだ体験から』東京：サイマル出版会。
- 嶺崎寛子  
 2009 「生活の中のイスラーム言説とジェンダー——エジプト「イスラーム電話」にみるファトワーの社会的機能」『アジア・アフリカ言語文化研究』78: 5–41。
- 森 伸生  
 2002 「ラマダーン」大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』pp. 1044–1045, 東京：岩波書店。
- 中山紀子  
 1999 『イスラームの性と俗——トルコ農村女性の民族誌』京都：アカデミア出版会。
- 大塚和夫  
 1987 「あご髭とヴェール——衣装からみた近代エジプトのイスラーム原理主義」片倉もとこ編『人びとのイスラーム——その学際的研究』pp. 365–420, 東京：日本放送出版協会。  
 1989 『異文化としてのイスラーム——社会人類学的視点から』東京：同文館出版。  
 1994 「ナイル河畔のマフディストたち——スーダン」片倉もとこ編『講座イスラーム世界1 イスラーム教徒の社会と生活』17–53, 東京：悠思社。  
 2002 「ウムラ」大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』p. 203, 東京：岩波書店。
- サキム, M.  
 1999 「新疆における伝統的生業文化」新免康編『アジア遊学1 越境する新疆・ウイグル』pp. 146–158, 東京：勉誠出版。
- 桜井啓子  
 2003 『日本のムスリム社会』東京：筑摩書房。
- 嶋田義仁  
 2001 「イスラームの「祈り」について——アフリカで考える」末木文美士・中島隆博編著『非・西欧の視座』pp. 55–80, 東京：大明堂。
- 清水芳見  
 1992 『アラブ・ムスリムの日常生活——ヨルダン村落滞在記』東京：講談社。
- Statistics and Maps on city Population  
 (Internet, 27<sup>th</sup> June 2012, <http://www.citypopulation.de/php/turkey-istanbul.php>).
- 高橋由佳利  
 2002 『トルコで私も考えた3』東京：集英社。
- Waardenburg, J.  
 Official and Popular Religion as a Problem in Islamic Studies. In P. H. Vrihof and J. Waardenburg (eds.) *Official and Popular Religion: Analysis of a Theme for Religious Studies*, The Hague: Mouton Publishers.
- Yurtbaşı, M (ed.)  
 2010 *2010 Student Dictionary English-Turkish / Turkish-English*, Excellence Dictionaries: Istanbul.
- ヴィカン, U.  
 1986 『カイロの庶民生活』小杉泰訳, 東京：第三書館（初出は1976年）。